

幻
城
記
第
三
話

福元
希高

第三話 露と消えにし 大坂城

天下布武の大義のもと、戦国の世を終わらせようとした織田信長が本能寺に散りてのち、世はまた天下争乱に逆戻りするかのように見えた。

次男信雄、三男信孝の家督争い、重臣たちの権力闘争が露骨に表面化する中、主君の仇、逆臣明智光秀を討って、その最大の功績を引っさげて主役に躍り出たのは、羽柴筑前守秀吉であった。

信長の死後、家督相続と領土の分配などを決定する会議が、尾張清洲城にて開かれた。重臣筆頭の柴田勝家が三男神戸信孝を推し、これに対し丹羽長秀は次男信雄を推挙した。ところが功労者の羽柴秀吉は意外な後継者を押し立ててきた。

織田信長と同じく、明智光秀によって二条御所で非業の死を遂げた、嫡男三位中将信忠の遺児三法師であった。

織田信長公の嫡孫である三法師君こそ正統の後継ぎであると主張したのであった。

まだ三歳の幼児である三法師だが、羽柴秀吉の言う正統の後継ぎに違いはなく、丹羽長秀もこれに同意し、池田恒興もこれに従った。

ここに後継者が決定したのである。

これにより羽柴秀吉は、相続争いに決着をつけ、自ら後見人となり、主導権を手中にしたのであった。

織田信長は敵対する大名、武將を次々に討ち果たし、奪い取った領国を戦功あつた家臣や従属した武將たちに分け与えていた。

信長の死後、直轄の領国は主に次のように分配された。

尾張 織田（北畠）信雄

美濃 織田（神戸）信孝 二人ともこれより織田姓を名乗る。

丹波 羽柴秀勝（信長四男、秀吉養子）

山城 羽柴秀吉

全てに不満の柴田勝家は、せめて秀吉の所有する長浜城を譲り受けたいと言い出した。勝家は内心承知はすまいと思っていた。だが、

「おお、よろしゅうござる。ただし住まわれるは、そこもとの御養子柴田勝豊殿にして頂きたい」

と、妙な提案をして話はあっさり付いてしまった。

織田家中、最高実力者になりつつある羽柴秀吉は、この後、織田信長四男で秀吉の養子、秀勝を喪主に立てて、京都大徳寺において

織田信長の葬儀を盛大に行ったのであった。

反秀吉派を封じる為に、弓、鉄砲隊など三万の兵士が警護に付いた。焼失して遺体の無い織田信長の代わりに、信長の木像を棺に納め、火葬にしたのであった。

羽柴秀吉は太刀持ちを務め、棺の側を離れず、その存在感により織田信長が果たせなかった大業を継承することを天下に知らしめたのである。

清洲城での重臣会議に欠席した重臣の一人に、滝川一益がいた。本能寺の変の時は関東管領という要職で、上野厩橋城にて北条氏直軍と戦っていた。柴田勝家が上杉景勝軍と対決して動けなかったと同じく、滝川一益も明智討伐軍には加われなかった。挙句に北条軍に散々打ち負かされ、自身も深手を負い、ほうほうの体で伊勢長島に逃げ帰っていた。

織田信孝は明智討伐に加わった実績を訴え、自分が家督を継ぐものと思っていたので、柴田勝家と盟約し、滝川一益にも味方するよう呼び掛けた。一益はすぐにこれに呼応したのである。

柴田勝家も羽柴秀吉のことを、

「成り上がり者の猿」

と罵り、いつか滅ぼしてやろうと考えていた。

自分の寄騎の、越中富山城主佐々成政や、七尾城主前田利家なども味方に引き入れていた。

「雪解けを待って挙兵する」

勝家は宣言し、信孝と一益に使者を出した。

北陸道の武将たちの不穏な動向が、機知に長ける秀吉に分からぬ筈がなかった。

織田信長に天下の人たらしと言わしめた、人懐っこい顔で、自分に味方してくれる大名をせっせと増やしていた。

常に腰を低くし、下手に出て、相手を持ち上げその気にさせてしまうしたたかさ。羽柴秀吉は、織田信長や明智光秀には無い天衣無縫の明るさと、決断力と行動の早さが身上の、機略に富んだ武将だった。

秀吉の頭の中では、信孝、勝家、一益たちに対する準備は着々と出来上がっていた。

次男信雄と三男信孝は、父信長生前より不仲であった。

信雄は嫡男信忠が亡くなった今、織田家を継ぐのは次男の自分が本筋であろうと思っていた。羽柴秀吉はそこに付け込んで、

「三法師君はまだ幼君、信雄様が父代わりとなりお家を治めねばな

りません。それがしと共に信孝殿を討ち取りましょう」

と持ち掛けた。

「おお、わしを立ててくれるか筑前殿」

信雄は大喜び、あっさり秀吉に懐柔されてしまった。

「俱ともに天を戴いたかず」織田信長生前より不仲であった柴田勝家と

羽柴秀吉は、ついに決着をつける時が来た。

仕掛けたのは秀吉の方が先であった。嘗ての居城で柴田勝家の養子勝豊に譲り渡した、長浜城を包囲して、降伏させてしまった。

続いて岐阜城の織田信孝も包囲してこれも降伏、今度は伊勢長島に向かい、七万の大軍で滝川一益を追い詰めたのであった。

養子の勝豊が秀吉に降りたと知り、柴田勝家は、

「猿め、戦の仕置きが達者である」

秀吉の機略と行動の早さに舌を巻いた。

雪解けが始まり、ようやく勝家も本軍を率いて北ノ庄城を発した。

この中には越中七尾城主前田利家の部隊も参加していた。

勝家と秀吉両軍は、琵琶湖に沿った賤しずヶ岳がだけで睨み合う事となった。

岐阜城で秀吉に一旦降伏した信孝は、柴田勝家が大量でこちらに

向かったのを知り、再び反旗を掲げたのである。

秀吉は動き回っていた。賤ヶ岳で睨み合いが続くなら一仕事と、二万の軍勢を率いて岐阜城を再び攻めようとした。だが、途中の大垣城に入った時、運悪く大雨になり動けなくなってしまった。

秀吉の足止めの報を聞き、柴田勝家の甥に当たる佐久間盛政は、

「よし、勝機来たれり」

と兵を繰り出して、秀吉の陣地大岩山砦を攻め立てた。

砦を守っていた攝津茨木城主中川清秀は奮戦するも、最後は壮烈な討ち死にを遂げた。

続いて岩崎山の陣地も奪い取られ、秀吉軍の賤ヶ岳の守将、羽柴秀長は孤立してしまった。

大岩山、岩崎山、両砦も落ちた報せを大垣城で受けた秀吉は、気落ちすることなく、にやりと笑い、

「よっしゃ、これからが本物の戦よ」

全軍に向かって、一気に賤ヶ岳まで大返しの走破を命じた。

秀吉、中国大返しに次ぐ二番目の大返しである。

ここからが秀吉の本領発揮であった。

兵士には、休息無し、飯は走りながら食らえ、と檄を飛ばした。

行く先々の里人には、早馬伝令にて金子をばら撒き、道々に松明を掲げさせ、兵士の走る足元を照らし、進軍を楽にさせた。

こうして、大垣、賤ヶ岳間、十三里を僅か半日足らずで駆け抜け、秀吉は弟秀長の待つ里山の陣地に飛び込んでいった。

鬼神に勝る兄秀吉のすばやい行動に、秀長は目を真つ赤にして喜んで。

「小一郎よ、戦況は如何に」

「明朝、押し寄せる事でしょう」

「よっしゃ、村人に銭をやって大勢集めよ。一斉に鬨の声を大きゅう上げさせよ」

「畏まりました」

小一郎秀長が答えた。

羽柴小一郎秀長は、兄ほど機略の才を持ち合わせてはいないが、堅実な戦法で与えられた兵力を最大限に生かし、数少ない時はできるだけ犠牲を出さずに守り、大軍勢で押し出す時はけれんみのない正攻法で攻めに攻め、敵に一分の隙も与えない戦上手であった。

またこの秀長は聡明で、兄秀吉の考える事をすばやく理解し、兄の言う通りにすぐ実行できる機敏な武将であった。

一方、柴田勝家、佐久間盛政たちは、秀吉が引き返して来るには三日後位と高をくくっていた。

突如、暗闇にこだまとなって響く喚声に愕然とした。

柴田軍は秀吉の本軍が戻ってきたと錯覚した。

「まさかこんなに早く。これはいかん」

佐久間盛政は兵を退いたのであった。

本隊が揃い秀吉軍が追撃を開始した。

この賤ヶ岳の合戦では、秀吉の若い直臣たちが一番槍を競って突進していった。

福島市松正則、加藤虎之助清正などが大活躍し、後に賤ヶ岳七本槍と称えられたのである。

この時柴田勝家は、寄騎の前田利家が戦わず陣を離れたのに驚いた。

秀吉は利家との旧交を重んじて、お互い刃やいばを交えぬ約束をしていたのである。

「退くしかあるまい」

無念の思いを引きずり、勝家は居城北ノ庄城に退いていった。

北ノ庄城に逃げ帰ってみれば、城兵は三百位しか残っていなかつ

た。

勝家は、再婚したばかりの妻で、信長の妹お市の方に、連れ子の三人の娘と共に落ち延びよと命じ、秀吉のもとに使者を送った。

「貴殿も御承知の浅井長政殿遺児三人の娘と、その母お市の方を城から出す故、身の保証を願うものなり」

秀吉は嘗て恋焦がれた事もあるお市の方と、その娘の事ゆえ、

「いかにも、お市様は我らにとっては主筋に当たる。この筑前、お守りする事を約束いたす」

と返答した。

しかしお市は城を出る事を拒否した。

羽柴秀吉は兄信長の命令とはいえ、浅井長政との間にできた幼い遺児万福丸を、串刺しにした憎い敵であった。

お市は、自分は勝家と共に自刃する事を決意、三人の娘、茶々、初、小督、を仇の秀吉に預けたのであった。

勝家は天守閣にて酒宴したのち、

「あの猿、強かったの」

と、秀吉を称えた。

猛将柴田勝家は、天守閣に火を掛け、妻お市の方と共に自害して

果てた。

勝家と同盟を結んだ滝川一益は秀吉に降伏し、残った三男信孝は、次男信雄に攻め立てられ、遂に自決したのであった。

これにて最早、織田家中で秀吉に敵対する者は一人もいなくなつた。

この後、羽柴秀吉のもとに、徳川家康から、そして敵であつた上杉景勝から、同じく毛利輝元からも、戦勝を祝う親書が送られてきたのであつた。

近江国穴太村にも夏が訪れようとしていた。

穴太衆 石工頭石切千四郎は日々雑多の中、自然と戯れ、平穏な時を過ごしていた。

彼はもう四十歳を迎えていた。若々しく精悍だった顔立ちにも、苦難を乗り越えた証の深い皺が刻まれ、石工頭としての風格が備わって見えた。

千四郎には妻子がいた。妻の名は静、五歳年下である。石切家の遠縁の娘で、千四郎は幼い頃に会ったことがあるが、元服を過ぎる頃には城造りで父伝衛門と共に動いていて、静とは疎遠になつてい

た。

人を介しての縁組の時、再会した静を見て、千四郎はどきまぎした。

すっかり女らしく、初々しい娘に成長した静が恥ずかしそうに座っていた。

もともと口数が少ない娘だったが、嫁いでも静は黙々とこまめに働き、石工衆たちや女房衆からも評判は良かった。何よりも千四郎が静を気に入ったのは、正直であることだった。

千四郎の話すことを真剣に聞き、全て信じる静を、千四郎はこよなく愛するようになっていた。

やがて男子が生まれ、小四郎と命名した。

すくすく元気に育ち、今は十歳の少年になっていた。いずれこの石切家を継いで、穴太衆石工頭になることであろう。

織田信長が安土城を築いて以来、この国は、各領地の武将たちがこれまで館といわれていた住居を城と改めるようになった。土塁から石垣に囲まれた城郭に改築する者が増え始め、特殊技能を持つ穴太衆がいろんな地方に狩り出されていた。

その指揮を執る石切千四郎を、戦国大名は武人扱いをして丁重に

もてなした。

小四郎を鍛える為に山歩きをしての帰り道、父子は話していた。

「小四郎、早う大きゅうなれ。大きゅうなれば他の国のありようを見て回れるぞ」

「それより私は大きゅうなったら戦に出たい」

「ほ、戦と申すか、わしもお前の歳の頃は同じことを言ったものだ」
小四郎に向かって、

「だが小四郎、これだけは言っておく。石工は武人に非ず。ゆえに戦に出てはならぬ」

「じゃ、どうして武術を習うのです」

と素直な問いに、

「石工は城の秘密を知る者。それゆえ敵も多し。おのれ自身で身を守らねばならぬ。だが戦に出て功名を挙げる為の武術ではない。よいか、良く聞け、石工は城を造り、城を残す為にあるのだ。石工は戦に出てはならぬ」

繰り返し、小四郎に言い聞かせる千四郎であった。

妻の静が門前にて出迎えていた。

「どうした、来客でもあったか」

と千四郎が尋ねた。

「はい、旦那様」

静は頷いた。

客人は羽柴筑前守秀吉の使者であった。

近江長浜城。過ぐる年、天正元年、羽柴秀吉は織田信長より浅井氏の旧領、江北三郡を与えられ、初めて大名に出世した。この当時は今浜と言っていたが、これを長浜と改め城を築いた。このときから官名筑前守を称したのであった。

今、嘗ての居城に来ていた秀吉は、せわしなく動き回っていた。

長浜城に召し出された千四郎は、側近の一人に別室に案内された。

側近の武士が名乗った。

「石田三成と申す。石切千四郎、此度は上様が直々にお会いなされる。暫くこれにて待つように」

簡潔なもの言い、端正な面持ちで良く通る声、穏やかな笑みを浮かべて、石田三成と名乗った武士は千四郎に語り掛けた。

近江穴太衆、今は総勢何人であるとか、今どこの領国にて築城しているかなど、優しい笑みを絶やさず、しかし千四郎との会話の中

に他国の情報を聞き出しているように思えた。

千四郎は別に隠し立てすることもなく、聞かれるままに素直に答えていた。

この石田三成という人物、頭の回転が早く仕事のできる男。流石天下を統べろうとする羽柴秀吉の側近である、と千四郎は直感した。石田三成は、千四郎の淡々と腹藏なく話す態度に満足しているようであった。

いよいよ秀吉に呼ばれ、石田三成に伴われ、奥の院に進んだ。

「おお、おお、穴太衆石工よな。千四郎と申すか、わしが筑前守であるぞ。いやあよう参った。今日は暑かったであろう。近う参れ」

初めて見る羽柴筑前守秀吉は、小柄で痩せてはいるが元気よく、日焼けした、愛嬌たっぷり表情をしていた。

人懐っこく、日向くさい。陽気でよく笑い、気取ったところは見せず、これがあの人たらしの筑前守であるかと千四郎は胸中呟いた。

——これは手強いお方である。

いきなり皿と水が差し出された。皿の上に瓜が切って載っている。

「わしの国里、尾張中村から取り寄せた瓜じゃ。ひやつこいぞ。わしも食う、そなたも遠慮のう食え。ひゃ、ひゃ、ひゃ、ひゃ」

明るい人物である。側にいる石田三成にも手ずから渡し、千四郎の皿にも自分の皿の瓜を移し与えた。

「頂戴いたします」

こうなれば押し頂き、食べるしかなかった。

——この羽柴秀吉という方、確かに織田信長様、明智光秀様には無い人間臭い魅力がある。これなら如何に強漢な人物でも抗うこと敵わず、呑み込まれてしまうだろう。今日ここに呼ばれた訳はただ一つ、築城である。一体何処に……

この筑前守が次の天下人となるかも知れない、千四郎はそんな予感がした。

「右府様は偉いお人じゃった。わしのような小者上がりを、仕来たりに関係なくお取立て下さった。わしと出世を争うた惟任も、左近将監も、軍功あれば周りを気にせず上げてくれた」

秀吉はしみじみと話す。

「千四郎よ、右府様の築いた名城も失くなってしまおうたのう。寂しいであろう、分かるぞ」

無言で聞き入る千四郎に、話し続けるのであった。

「だが右府様の大業、この筑前守が引き継ぐ決意である。安土に代

わる天下の名城をこのわしが築く。右府様のお声掛かりだった其の方ら穴太衆、これよりこの筑前守の膝元で精進せよ」

「畏れながらお聞きいたします」

「おお、なんでも聞け千四郎」

「先ず、いずこに城を築くのでございましょう」

「驚くなよ、大坂じゃ。石山本願寺跡の大坂に広大な城を築く。今まで見たことのない、勇壮美麗、堅牢無比、難攻不落の天下人の居する城じゃ。ひや、ひや、驚いたか」

「それは、確かに驚きました」

と千四郎。

「いま一つ、これはお願いの儀にござります」

「おお、おお、言うてみい、言うてみい」

秀吉は機嫌が良い。

「我ら穴太衆石工は、築城の為の雇われ職人にござります。天下の城、成したるのちは、命の保証と、職のご放免をお約束下さりますようお願い致します」

「ふうむ、雇われか。仕官、知行は望まぬとな」

「はい、石工は技能職人。戦場に出向く武人の真似事はできません」

「ほい、よう分かったぞ。いやそれでよい。築城なった暁には、勝手気儘とするがよいぞ。それと恩賞はたつぷり取らす。おお、そうじゃ、ちとこれにおれ」

秀吉はさつと座を立つと、すぐ何か掴んで戻ってきた。

「千四郎よ、妻子がおるか。これを取らす。女房に、ええべべ着せ
たれや」

ぼんと千四郎の前に投げ出した。それは綺麗な反物であった。

「大坂築城の総奉行は浅野長政に命じておる。地取り、縄張りは軍師をやつちよる黒田官兵衛が取り仕切る。わしとの細かいやり取りは、ここにおける石田三成、こやつに相談せい。時折わしや顔を出すぞ。いつでも遠慮のう会いに來い。よいな」

にっこり笑った秀吉は、後を見ずにさつさと引き上げていった。

石田三成がにこにこしながら、

「上様は大層其の方を気に入られたようだな。めでたいぞ千四郎、
後はこの私と話し合せて事を進めようぞ」

「これよりお世話になります。何卒よしなに」

羽柴筑前守秀吉への、初めての拜謁は無事に終わったのであった。

一向宗総本山、石山本願寺が焼き払われたのは天正八年であった。

その跡地大坂に、千四郎は穴太衆を引き連れてやって来た。

総奉行の浅野長政に面会し、地取り、縄張りの総指揮官、黒田官兵衛孝高にも会うことができた。

羽柴秀吉の軍師は世に聞こえた竹中半兵衛重治であったが、四年前、惜しまれつつ病死した。後を受けて軍師になったのが黒田官兵衛孝高であった。

戦国武将らしい風格のある人物で、じつと相手を見据える鋭い眼光に凄味があり、片脚を引きずっていた。

荒木村重の事件で説得の役を仰せつかり、有岡に入城したが聞き入れられず、逆に牢獄に監禁されてしまったのである。落城のとき救出されたが、片脚が不自由になってしまった。築城の術に長けると言われる黒田孝高は不自由な片脚を引きずりながら、あれこれ細部にわたって千四郎に指示を出し、石積みのごとは千四郎の説明を熱心に聞いていた。

黒田孝高は普請、作事の総指揮官でもあるが、軍師として秀吉の側におらねばならぬ身。それゆえに普請奉行補佐に中井正吉が付けられていた。黒田孝高は中井正吉に一言いった。

「あの石工、千四郎という男、使えるぞ」

天正十一年、海内かいだい 無双といわれる大坂城の築城が開始された。

織田信長に天下一の地であると言わしめた大坂は、奈良、京の古都に近く、港も広く、川が数多く流れていた。海陸の交通が可能であり、軍団を船にて全国に出撃させ、瀬戸内海を支配することができた。これにより四国、中国、九州を平定することができ、外国との貿易も容易になるのであった。

秀吉は諸大名に築城の助勢を呼び掛け、千四郎たちによる石狩りも順調に進んだ。瀬戸内海から巨岩を石船で運び込み、畿内一円からも巨岩、大石が次々に持ち込まれた。

穴太衆石工たちは、手際よく巨岩を一列にし、数個ずつ矢穴を開け、鉄の楔くさむしを大金槌で打ち込み、石垣用の形を作り出していった。

千四郎の指導のもと、槌で石の角を叩き、平たく形作り、どんどん重ね、組み合わせていく打ち込み接はぎの石積み法が用いられた。城門などの部分には、鑿ので石を削り、隙間を埋め、組み合わせる切り込み接などの手法が取り入れられ、城は手際よく形作られていった。

石垣の最上部は、石を突き出させ、敵兵のよじ登りを防ぐ為考案された「榩出はねし」と呼ばれる新技法で、千四郎が切支丹伴天連から

得た知識を新しく工夫したものであった。

石垣の隅、角ばった部分は「算木積み」という特殊な積み方が取り入れられた。これは安土城でも試されたが、千四郎は特に角を崩さぬように、長い切石を互い違いに組み合わせるようにした。これらは父伝衛門が工夫したものに千四郎が新たに手を加えたものであった。

山城、山崎城を居城としている羽柴秀吉は、しばしば大坂にやってくる。築城の進捗を確かめていた。

秀吉は季節の野菜、果物、漬物、焼き魚、酒を小姓たちに持たせ、築城の土木工事にあたる普請、建築工事に当たる作事の土工、石工、他の労働者たちにどんどん配って労をねぎらった。

この頃の城造りでは、建築の作事より土木の普請のほうが重く扱われるのが慣例となっていた。

「おお、おお、良くできておる。流石は穴太衆、右府様が大事にされただけのことはある。たんと食べ、たんと呑め、作業は進むぞう」

この大名はいつも陽気に笑い飛ばしている。

「千四郎、ここにおるか。ご苦勞である」

「上様、上等なるお振る舞い、一同感謝しております」

「おお、わしのかか様の漬物は天下一じゃ」

「仰せの通りにござります。さて、上様にお尋ねしたき儀がござります」

「うむ、聞いて取らす」

「強力なる石垣造りに、鉛が必要でござります。手に入らば試しと
うござります」

「鉛とな」

「はい、南蛮の国々は高い高い石垣の重要な部分は、鉛を使用して
接合します。それにより頑強なる石垣を積み重ね、勾配をとる技法
にござります」

千四郎は若い時、切支丹宣教師から教わった異国の石積み法を、
てきばきと説明した。

「おお、よし、鉛ならばわしの名のもとにすぐに集めさせよう。如
何に千四郎、このわしの為に末代まで残る石垣を造って見よ」

「は、〃鉛ちぎり〃御披露仕ります」

ちぎりとは契りと同じ結ばれる意味で、石積みの接着技術に付け
た千四郎の造語であった。

賤ヶ岳の合戦の後、不仲だった弟、三男信孝を自害させた次男の信雄は、羽柴秀吉の勢いが増すばかりの現状に、だんだん秀吉への不審が募ってきた。

秀吉がいずれは次男信雄も殺すだろうという、世間の風評に怯え出したのである。

事実であった。秀吉の調略が始まっていた。

信雄の三人の家老を味方に引き入れたのである。しかしこの事は簡単に露見した。激怒した信雄は三家老を誅殺してしまったのだが、これも秀吉の計算づくのことであった。

孤立感を深めた信雄は、嘗ての父信長の盟友、今や五カ国の太守になっている徳川家康に救いを求めた。

家康は亡き右府様のお子が為であると、戦の名目を掲げ信雄と同盟し、小牧山に布陣した。

秀吉も心得ていて、犬山に本陣を構えた。

小牧、長久手の戦いが始まったのである。

家康は密かに四国の長曾我部元親や紀伊根来寺僧徒根来衆、本願寺門徒雑賀衆などに呼び掛け、反秀吉連合を作り上げようとしていた。

このこと承知の秀吉は、別に動じなかった。すでに弟、小一郎秀長を伊勢、伊賀に向かわせていたのである。

秀吉同盟軍の将、池田恒興が「中入りの策」を提案した。家康が小牧山に陣を張っている隙に、家康の本領、三河岡崎城を攻め取って、戦況を一挙に有利にしようと企んだのである。

「恒興殿、家康は戦上手、引つかかるとは思えんがのう」

秀吉は一度はこの提案を避けたのだが、再度に渡る懇願に、「相分かった、では甥の三好秀次を先陣の大將に付けようぞ」

軍功のない秀次に箔を付けようと思いついたのである。

事は隠密裏に謀らねばならぬのに、池田隊は無用心に兵を進め、たちまち家康の知るところとなった。

「小賢しき策なり」

家康の大軍が襲い掛かり、猛将池田恒興は戦死、娘婿の森長可（森蘭丸の兄）も銃弾を眉間に受け即死。秀吉の甥秀次は、ほうほうの体で逃げ帰ってきた。初戦に大勝した家康軍の意気は上がった。

だが秀吉は慌てなかった。

「さすが家康、聞きしに勝る強さだのう」

と感心している。

たかが初戦の小競り合いにやられただけである。

秀吉の心中は割り切っていた。池田恒興や森長可は、織田信長以来の旧家臣としての付き合いであり、駿河、遠江が欲しくて秀吉側に付いただけであった。

討ち死にしたとはいえ、領国を取られた訳ではなく、かえってこれですら遠慮なく直臣に分け与えてやれると内心思っていた。

秀吉のもとに吉報が入った。小一郎秀長軍があっさり伊勢、伊賀を征服し、信雄を益々追い詰めていた。

「ほっほう、小一郎め、やりおる。あやつは命じた事は必ずやっつてのける」

盟友、信雄がどうにも動けずにいる状況で、家康軍は時々小競り合いを仕掛けるが、秀吉は動じずどっしり陣を構えていた。

膠着した状況で、本陣が動いた方が不利になる事は、秀吉も家康もよく分かっていた。

気が付いて見れば、秀吉は新たに三国を手中にし、家康の方は相変わらず五カ国の所領のままであった。

「ここらでやるか」

秀吉の人たらし調略が始まった。

信雄に使者を出したのである。

「今日こんにち 私がここにあるのも右府様のお陰であります。ここまで育ててくれた恩を何ぞこの筑前忘れましようぞ。またお子であらせると信雄殿に何の意趣がござろうや。世間の悪しき風聞に干戈を取られしゆえ、行きがかりでこのような仕儀に相成り、この筑前、胸が張り裂ける思いでございます」

——助かった。

内心そう叫んだ信雄は、大喜びで、家康に相談もせず単独で和睦してしまつたのである。

やはり信雄は愚将であつた。

「三介が、簡単に引つ掛かりおつて」

信雄の旧名を呼び捨てにして、秀吉はほくそ笑んだ。

信雄単独講和の報せは、家康のいる岡崎城に届いた。

「馬鹿な、誰の為に挙兵したと思つているのか」

激怒したがどうしようもなかつた。

信雄と秀吉が和睦した以上、大義名分はなくなり、兵を退くしかなかった。

家康は渋々、外交武将として家老の石川数正を秀吉のもとに送り

出した。

「織田家羽柴家が和議相成りしこと、天下万民の為、祝着至極に存じます」

と家康の口上を述べた。

秀吉は天下人たる威厳を保たねばならぬ身、家康の次男、於義丸を人質に出すよう、石川数正に伝えた。人質を出せば、秀吉の軍門に下ることになる。家康はこれを拒否、落としどころで秀吉の養子に出すということで政治決着。於義丸には養父秀吉の秀、父家康の康を取って秀康と名付けられたのであった。

天下統一を目指す秀吉は、休むことなく戦を続けていった。

以前、家康の呼び掛けに呼応して立った紀伊、根来寺の根来衆、本願寺の雑賀衆を十万の軍勢で押し出した。

根来寺は爆破、太田城に籠る雑賀衆は秀吉得意の戦術、水攻めで全滅させた。

天正十三年、羽柴筑前守秀吉は朝廷より、これまでの従三位権大納言から正二位内大臣に叙任され、関白に任官された。これにより姓を羽柴から藤原に改めることになった。

ここに秀吉は、天皇に代わりて国を治むる地位を得たのであった。

秀吉の弟、小一郎秀長。兄の盛名の影に隠れ、目立たぬが戦術に長けるこの秀長も、従三位参議と叙進された。

秀吉は四国、長曾我部元親討伐軍の総大将に秀長を任命、六万の大軍を渡海させたのであった。

家康に呼応して敵対していたことが仇となって、四国の雄、長曾我部元親は降伏した。秀吉は元親に臣従させ、土佐一国を安堵して兵を退いたのである。

大坂城が完成するのを待てない秀吉は、居館ができるまでとさつさと移り住んでしまった。

築城開始三年目のことである。この後、壕堀の内外など全て完成するまでに四年の歳月が掛かった。

秀吉は天守閣の完成を急がせていた。ここに全国の諸大名を集め、平伏させることに夢中になっていた。

「先ず家康を屈服させようぞ」

家康が上洛し、秀吉の前で臣下の礼を示すことにより、まだ秀吉に臣従してない毛利、上杉、北条、伊達、九州の各大名たちもそれ

に倣い軍門に下ることは間違いなかった。

再三の上洛を促す秀吉に家康は肯んじなかった。秀吉の要求を拒否すればするほど、家康の勇名が世間に広がっていった。

秀吉の狡猾な調略がまた始まった。

秀吉は、家康が織田信長の命で正室築山殿を殺してのち独り身でいるのを見て、自分の妹、旭を家康の後妻にしようと策を巡らした。

妹、旭は佐治日向守に嫁いでいたのだが、これを強引に離別させた。その後、家康の正妻に迎えて欲しいと伝えた。

家康と重臣たちは困惑した。だがその中で、今ここで関白の地位にいる秀吉と事を構えるは家の滅亡に繋がる、とする石川数正の意見を取り、受けざるを得なかった。

家康側も条件を付けた。関白様妹御に男子生まれたるも、家督は継がせず。秀吉も了承し、家康の後妻に旭御前が嫁したのであった。

これは正妻とはいえ人質に出したようなものである。

それでも上洛せずにいる家康に、今度は実母なか、大政所を人質に出し、上洛を強要した。体面上は娘、旭の近況見舞いという名目であった。

秀吉に臣従してしまった信雄のとりなしも無視できず、ここに至

って家康は、大政所を丁重に大坂に送り返し、上洛を決意したのであった。

大坂城では天守閣が完成した。

これまでに秀吉は数多くの城を築いてきた。長浜、横山、姫路、山崎、郡山、やがてこの後、聚楽第、淀、肥前名護屋、伏見、三木と築いていくのである。しかしこの大坂城だけは特別であった。

天下の牙城。助勢大名四十家、近隣からは職人、農民が駆り出され、普請、作事に従事した。

地下二階、地上六階建ての天守閣。絢爛豪華、勇壮華美、これを目にする大名、公家衆、商人たちは、天下人秀吉の富、権力の前にひれ伏すしかなかった。

地下一階二階は武器、火薬庫である。地上一階二階は異国からの宝物を納め、三階は国内からの宝物殿。四階五階は金銀を収納する蔵となり、六階は物見の間になっていた。

広い城内の庭園造りに従事していた石切千四郎の前に、男が立った。気配に気付いて千四郎が顔を上げると、

「懐かしいな、千四郎さん」

「これは千宗易様」

二人は顔を見合わせ微笑んだ。

宗易とは何年も顔を合わせていなかったが、お互いの消息は人づてに聞いて知ってはいた。

堺の会合衆、千宗易、今井宗久、津田宗及の三人の茶匠は織田信長に近侍していたが、信長の死後、秀吉に召し出されて茶道を以つて仕え、それぞれ三千石で召抱えられていた。

特に宗易は秀吉の覚えめでたく、茶頭に任じられていた。また会合衆の切支丹商人、小西隆佐の息子行長は、秀吉の側近として仕え、いずれ大名に取り立てられると言われていた。

この頃になると千宗易は、家業の納屋（倉庫業）の権利を身内に譲り、茶道一筋に精進していたのであった。

織田信長暗殺の一件に会合衆が一役買ったことは、秀吉も、勿論千四郎も知るよしもなかった。

二人は再会を喜んだ。宗易は秀吉の寵愛を受けて茶頭を務め、近々京屋敷を賜る事を千四郎に告げた。

「関白殿下には、近々禁裏に上がり、天子様に茶を献上する手筈になっております。私とその茶席を務めることになりました」

千四郎は目を丸くして驚いた。

「禁裏には官位がなくては参内できないのでは」

と千四郎が言うと、

「その通りです。私の為に殿下は朝廷に奏請されました。なんと、この私が朝廷より官位、居士号、利休を勅賜されることになりました。その時より私は千利休と名乗ることになります」

「驚きました。御出世おめでとうございます」

千四郎は慌てて跪まがいた。

「あ、いけません千四郎さん。私は一介の茶人。どうぞいつものように、さき、お立下さい」

言われて千四郎は、宗易の前の石に座り直した。

「今井宗久様、津田宗及様はどうしておられます」

「今井宗久さんは堺にて病に臥せっております。いやいや、たいした病ではありません。あの方のこと、世情が怪しくなれば身が自然と動き始めましょう。ははは。津田宗及さんは私と同じ茶匠として、

今は山崎城におられます」

ここまで言って宗易は顔を曇らせた。

「実は殿下の茶道は、ちと煌びやか過ぎましてな、私の求める茶の

教えとはかけ離れてしまいます」

「茶道は私には分かりません」

「私の求める茶の道の教えは、侘び、つまり簡略された世界です。できるだけ余計なものを削ぎ取り、これ以上削るところ無しの究極の簡素、これが侘びの世界です。これにより緊張感が生まれ、崇高な精神に昇華する。それが侘び茶の教えなのです」

「私にはできません。またその身分でもありません」

「千四郎さん、茶に身分はありません、落ち着いたら私の屋敷を訪ねて下さい」

宗易は真剣に語り続けた。

「武人の茶、町人の茶、私の求める侘び茶の精神は、身分を超えた世界にあります」

「私に茶の心得できるでしょうか」

「必ずできます。茶の心を一緒に励みましょう。それにしても殿下の行う茶会は、全てに派手過ぎて興醒めしてしまいます。あれは文化、教養、芸道とは掛け離れた世界です。おお、これ以上話すと誰ぞに聞かれ、私の首が飛びます。ははは」

ここまで言って千宗易は笑いながら立ち上がり、千四郎に別れを

告げて立ち去っていった。

——身分を超えた侘び茶の世界。

千四郎は一人、考えを凝らしてみた。

天正十三年、秀吉は藤原姓を頂き関白の位に付いた御礼に、内裏で茶会を催すことになった。このことは前代未聞であり、世間をあとと驚かせた。持ち込まれた道具類、屏風、衝立、茶器、茶釜、全てが黄金で作られていた。派手好みの秀吉の発案であった。

官位居士号、利休を賜って秀吉の後に続き参内した宗易は内心、この悪趣味な黄金の茶器類には辟易していた。

正親町天皇に茶を献ずる秀吉は、感激で震え、金の茶碗がかたかた音を立てた。千利休となった宗易は落ち着いて秀吉を補佐し、禁中茶会はめでたく終了したのであった。

この日、正親町天皇より関白秀吉に唐物の玉杯が下賜された。

天正十四年、徳川家康がようやく重い腰を上げ、上洛してきた。

弟秀長の屋敷を宿舎にあてがわれ、家康一行は宿営した。

秀吉は酒と料理を携え家康に会いにやってきた。関白の方がわざわざ出向いたのである。

「家康殿、一瞥以来ですな。妹旭を嫁に貰って頂き、感謝致す。また、遠路お上り下さり、秀吉、嬉しく思いますぞ」

「いや、これは痛み入ります。天下人となられし殿下に礼を尽くしに上洛しました」

「おう、天下人とお認め下さるか、家康殿」

嬉しさに涙を浮かべる秀吉であった。

これが人たらしの極意かなと、ちらつと感じた家康であったが、腹の底は見せず、

「天下人は殿下お一人。他におられましようや」

「おお、おお、家康殿こそ古今一の大將」

家康の家臣たちにも手ずから酒を注いで回り、

「家康殿と私は兄弟同然でござる」

と喜びを全身で表し、

「上洛の御礼に近江、守山三万石の領地を差し上げます。お受け取り下され」

「これは身に余る光栄、いや畏れ入り奉ります」

この後、秀吉は家康の手を取り、

「天下の為、万民の平和の為、明日大坂城に於いて、諸侯の前で臣

従の意を示して頂けまいか。この通りでござる」

と家康に頭を下げた。

関白に手を取られ頭を下げられては、常識人の家康は、これに応じるしかなく、

「どうかお顔をお上げ下され、委細この家康承知しました。明日臣下の礼を取りましようぞ」

と約束してしまつたのである。

家康は秀吉が上機嫌で帰つた後、

「やれやれ、上洛したからには致し方なし」

と家臣にぼやき、今は我慢の時と観念したのである。

やはり秀吉は天下一の人たらしであつた。

翌日、大坂城に上つた家康は、秀吉の前に進み出て拝謁の言上を述べた。

秀吉は前夜とは打って変わった態度で、

「三河守、上洛大儀である」

大音声で言い捨てた。家康も心得て、

「家康、上洛したからには殿下に代わりて、この身が甲冑を纏い、兵馬の労を取りて、おん敵を討ち果たし、殿下を御守護仕ります」

「三河守、よくぞ申してくれた。皆の衆、この徳川家康殿こそ武人の鑑である」

秀吉の念願叶い、家康はこうして秀吉の臣下となり、別格の大名として遇されることになった。

この後、秀吉のもとに上杉景勝や毛利輝元からも、恭順の意を示す為、上洛の報せが入ってきた。

これで、秀吉の天下統一の大義に従わぬ者は、北条氏政、氏直父子、伊達政宗、そして九州の島津義久、義弘兄弟、これらを残すのみとなっていた。

天正十四年、正親町天皇が退位し、後陽成天皇が即位した。後継天皇となる筈の誠仁親王が急逝され、皇孫の和仁親王に譲位されたのである。織田信長による譲位の強圧を撥ね付けた反骨の帝も、秀吉の巧みな根回しに屈したのであった。

秀吉は先年、近衛前久の猶子として藤原の姓を得て関白位に就いた。前久の娘、前子さきこを新天皇の女御として入内させた秀吉は、形の上で前子の兄に当たり、皇室の外戚となったのである。

それにより秀吉は、新たに太政大臣に任ぜられ、位人臣を極めた

のであった。

そして藤原の姓から、新たに豊臣の姓を賜り、関白太政大臣豊臣秀吉となったのである。

「余は豊臣秀吉である。従わぬ者は成敗いたす」

正に端倪すべからざる勢いであった。

関白として六十余州に、“惣無事令”を発した秀吉は、九州にて反秀吉の反旗を掲げる島津義久たち四兄弟に、十二万の大軍を率いて進軍した。

強悍、島津軍も、圧倒的な軍勢に成す術すべもなかった。日向、根白坂の一戦にあっさり敗れ、三男の歳久は弟の豊臣秀長に殺され、四男の家久は切腹、とうとう当主島津義久は剃髪して謹慎の意を示し、降伏したのであった。

この時から義久は、弟義弘に家督を譲り、龍伯と名乗って隠居した。

意外や、秀吉は島津の薩摩、大隈、日向三州の旧領を安堵して、度量のあるところを世間に知らしめたのであった。

天正十五年、京都北野神社にて大茶会が催されると、畿内一円に

高札が立てられた。

後世に伝わる豊臣秀吉北野大茶会である。

全てに派手好きで、世間を驚かすことが好きな秀吉らしい発案であつた。

高札には、身分上下の区別なく、数寄者なれば茶道具を持ちて自由に参加せよ。と書かれてあつた。

当日は全国の大名、公家衆、商人、町人で大盛会であつたという。

博多からは豪商で茶人の神谷宗湛、島井宗室なども参加、堺衆と張り合うところを見せた。

神社の拝殿は三つに仕切られ、その中央に秀吉自慢の黄金の茶室が備えられた。そこで千利休、今井宗久、津田宗及の三匠、そして秀吉も亭主となり参会者に茶を振舞った。

秀吉自身が茶を点てた数、八百数十人に及んだという。

参会者の中に石切千四郎がいた。

—— 凄い人の数だ、どうもこれは苦手だ。

一般用の茶室、千五百程が建ち並ぶ、人渦の中を逃れて、庭園に身を移した千四郎は、落ち着きを取り戻す為に池の側で休息した。

確かにこの日は無礼講で、身分の上下なく人が気儘にすれ違つて

いた。

千四郎のいる池の近くに、数名の女性が近づいてきた。身に着けている衣装から見て貴婦人のようだ。一人は老婦人、もう一人は中年の婦人、その後ろを三人の女官らしき女性が付き従っていた。女官の一人は尼僧であった。何気なくその貴婦人たちをやり過ごそうと、千四郎はぼんやり見ていた。

と、その時、

「あいた」

と老女が大声を上げ、身体を捻じ曲げるように倒れ掛かった。

社殿に見とれて足元の石に気付かず、躓いたのであった。堪えきれず老女はたたらを踏んで前につんのめっていった。前方は池、横は大石、池に落ちるか、大石に頭を打つか、

「や、いかん」

千四郎は身体を跳ね上げ老女の下に身を挺した。

咄嗟の動きであった。千四郎の上に老女が落ちていった。

身体ごと受け止め、千四郎は抱き上げたまま、少し離れた場所に老女を移して立たせた。

鮮やかな手並みであった。

周りで目撃した参会者たちは、手を叩いて誉めそやした。

中年の貴婦人が慌てて老女に駆け寄り、お付きの女官、尼僧も急いで老女の足元を確かめた。真っ白な足袋に血が滲んで見えた。

立ち去ろうとする千四郎に、中年の女性が声を掛けた。

「お待ちを、危ないところをよう助けてくれました。母に成り代わりお礼を申します」

母と言われた老女も、足をさすって貰いながら、

「この婆ばばをよう救ってくれました。頭を打つか、池に飛び込むところでした」

老女の足を拭きながら尼僧の女官も、

「お見事でした。名をお聞かせ下さい」

と言った。

「足を痛められました。先ずは御無事の様子。本日は無礼講のお許しが出ています。名乗らず失礼致します」

と千四郎は答えた。

すると中年の婦人が、

「それでは後で殿下に叱られます」

殿下と聞いて千四郎は、はっとした。

「本日は無礼講なれど、母様の大事とあつてはこちらも名乗りましよう」

すかさずお付きの尼僧が、

「これにおわすは関白殿下の母君、大政所様、またこちらのお方は御正室北政所様にござります」

「これはご無礼仕りました」

驚いて千四郎は平伏した。

大政所が大きな声で、

「今日のところは、この婆は『なか』この人は『寧々』ですよ」と言つて笑い出した。尼僧もつられて笑い、

「私は北政所様の女官、孝蔵主と申します」

「近江の石工、石切千四郎と申します」

「おや、穴太衆とか言う、石工ですか」

寧々、北政所が尋ねた。

「はい、石工頭を務めまする」

「どうりで素早い身のこなしでした」

この後、北政所は明日大坂城内、山里御殿に参るように命じ、大政所を支えながら去つて行つた。

翌日、命に従い千四郎は登城した。

大坂城の広い曲輪の北側奥御殿、その内の山里御殿が、秀吉の母なか、大政所の住居であった。大政所は足の爪を割っただけで、もう元気になっていた。

そこには秀吉の正妻寧々、北政所と孝蔵主もいた。この孝蔵主という尼僧は、北政所の女官長、今で言う秘書官であった。

山里御殿は、その名の通り山里を模した御殿であった。四季の花々が絶え間なく咲き、大政所は昔に返って野菜を育て、青菜料理を作っては秀吉に届けていた。

千四郎に茶と大政所手作りの漬物、果実が出された。

昨日の謝礼に、千四郎への金子と家族への食料、衣料品が揃えてあった。

千四郎には拝受辞退ができなかった。

二人から丁寧な謝辞が述べられ、御礼の品々が手渡された。関白秀吉から「天晴れなり」とのお言葉も孝蔵主から伝えられた。

帰途、千四郎は国許にいる妻の静と倅小四郎が、この品々を受け取った時の顔を思い浮かべ、苦笑したのであった。

この頃豊臣秀吉は、大坂城は政まつりごとの拠点とし、自身は位人臣を極め皇室の外戚となった以上、京都での居館が必要になっていた。

そこで関白としての壮大な邸館を造営することにした。

聚楽第である。館といっても平地に造られた城郭であった。

京の都に贅を尽くした華麗な関白邸が出現した。内外の装飾は秀吉好みの黄金色に輝いていた。

完成して間もない頃、この聚楽第に後陽成天皇が行幸した。

雄大で豪放で華麗なる館内を秀吉は御覧に入れ、帝も大層満足され、三日の予定を変更して五日も滞在したのである。天皇が臣下の館に行幸する、これも前代未聞の事であった。

秀吉はこの時、徳川家康、前田利家ら二十九名の大名に、関白の命に従うとの起請文を提出させた。豊臣政権を磐石のものにする秀吉の機略であった。

秀吉はこの聚楽第の中に、のちに御庭焼と呼ばれる基になる焼き物窯を作った。

窯といっても、六古窯の穴窯や登り窯のような大掛かりなものではなく、単品だけを焼く大型七輪のような姿の窯であった。

侘び茶の完成者、千利休の指導の下、瓦職人の長次郎に聚楽第内

の土を使用して茶道の茶碗を焼かせたのである。

聚楽焼の始まりであった。筒型や沓型の形を轆轤ろくろを使わず手捏てねにて形作り、釉薬を掛けて焼成した。

やがて工夫を重ね、焼成中、釉薬も溶け真っ赤になった頃合を計り、窯から引き出し一気に急冷させる。器は黒く変色し、やがて漆黒の茶碗が出来上がった。

利休好みの黒楽茶碗の誕生である。

しかし、全てに派手好きの秀吉は、黒色を嫌った。

「黒は縁起が悪い。余はもっと派手なのが良い。利休よ、赤じゃ金じゃ」

赤土を素焼きにし、透明の釉薬を使った赤色の赤楽茶碗が出来上がり、秀吉はそれを大層喜んだ。

赤楽茶碗も良いのだが、こればかりは好みの違いと利休は苦笑した。

ちなみにこの黒楽茶碗は美濃焼の瀬戸黒や織部黒に共通するものである。

この聚楽焼は二代目常慶の父、田中宗慶が、秀吉から聚楽第の楽の文字の印章を賜り、これを用いて家号にしたものである。

これが楽焼の始まりであった。

天正十七年、豊臣秀吉は北条氏政、氏直父子に上洛して臣従するよう求めていたが、一向に埒が明かず、業を煮やした秀吉は家康と話し合い、北条討伐を決定した。北条氏直の正妻は家康の娘、督姫だったからである。

秀吉は討伐軍の先鋒に家康を任命し、三男の長丸を人質として預かった。この時秀吉は長丸の烏帽子親となって元服させ、諱いみなの一字を与え、秀忠と名乗らせたのである。

家康は駿府城を開放し、秀吉の本陣に当て、自分は小田原へ向かった。

やがて秀吉軍総勢二十四万の兵が、小田原城を取り囲んだ。

緒戦は海上であった。秀吉の配下、九鬼、長曾我部の両水軍を配して、嘗ては剛勇を誇った北条水軍を壊滅せしめたのである。

秀吉は小田原城を落とすのに急がなかった。

兵糧攻めの戦法を取ったのである。そこで古来からの城攻めの戦法の一つ、**“陣城”**を用いた。城攻めの時、敵城に対して眼前に入る距離に對の城を築く。これが陣城である。

小田原城の眼前、石垣山に城を築き、あろう事か天守閣まで造ったのである。

その昔、秀吉は織田信長の命で墨俣に一夜城を築いて、敵軍をあとと驚かせた事がある。

今回はそれをもっと大規模にした城郭であった。

秀吉は石切千四郎に命じ、穴太衆を四十人程連れてきた。石垣を巡らし、大手門まである本格的な城を造らせた。

あれよあれよの内に目の前に城が建ち、小田原城兵たちは恐れをなした。

これも後年、秀吉石垣山一夜城と呼ばれたのであった。

秀吉は従軍の大名たちに国許の妻妾などを呼ぶことを許し、自分も側室を呼び寄せた。

数寄屋御殿も造り、千利休に陣中茶会を開かせたり、能楽を催したりした。酒宴、舞なども連日行われた。

秀吉の力を各大名に見せ付けるのが目的であった。

後世に、小田原評定という言葉を残した小田原攻めは、滞陣三ヶ月にも及んだのである。

千利休の茶道の一番弟子に、山上宗二という男がいた。堺の商人

の出であるが利休に侘び茶を習い、才能を買われて一時は秀吉の茶頭を務めた。だが秀吉の茶道に対する心構えを宗二は受け入れず、秀吉の勘気に触れ、追放された。その後小田原まで流れ、今は北条氏の茶匠になり小田原城内にいた。宗二は師の利休が石垣城まで来ているのを知り、城抜けして師を訪ねた。

いつも宗二を気に掛けていた利休は、秀吉に宗二が城抜けして訪ねてきたことを告げ、宗二の許しを乞うた。秀吉は機嫌よく宗二を召し出した。

「宗二、城抜けせし事、褒めて取らす。久し振りに茶を点てよ」と宗二に命じた。

しかし反りが合わなかった。茶を点てる宗二に作法が違うと秀吉が怒り出し、宗二もむきになって反論した。

「慮外者、余をなんと心得る。余は関白、天下人なるぞ」

秀吉の逆鱗に触れた宗二は捕えられ斬刑に処された。宗二の鼻と両耳は削ぎ取られていたという。

秀吉軍の本陣、石垣山城に、陸奥の猛将、伊達政宗が参陣して来た。奥羽を半分手中にした政宗だったが、二十四万の大軍で北条を滅ぼしたのち、奥羽に兵を進める事を知り、これはもう勝てぬと

判断、秀吉のもとに帰順して来たのであった。

秀吉は政宗を一目見て、政宗の武将としての資質を見抜き、これは役に立つと判断した。

「伊達政宗よ、此度の遅参、特別許す」

と言いながら政宗に近づき、軍扇でぽんと肩を叩いた。この後、政宗から会津を召し上げ、残る出羽、陸奥の領国を安堵してやった。

小田原城内では連日軍議が開かれていた。小田原評定である。

遂に北条氏直は降伏を決意した。秀吉の前に跪き、自分は腹を切る、その代わりに父と家臣を助命してほしいと願った。秀吉は、氏直が家康の娘婿であるのを考慮して、命を助け、高野山に謹慎させた。だがしかし、父氏政と重臣たちは断じて許さず、切腹させた。

小田原城は一度も戦火を交えることなく、落城したのであった。

これで北条氏も滅び、奥州も平定した秀吉に、最早楯突く大名は一人もいなくなった。

ここに豊臣秀吉、織田信長の残した大業を引き継ぎ、とうとう天下統一を成し得たのであった。

後は天下第二の実力者、徳川家康を京から遠ざけるのみ。秀吉はその方策を練った。

「家康殿、何卒この秀吉の願いを聞き入れて、関東に入って下さらぬか」

「関東でございますか」

家康はできるだけ無表情で聞いた。

「おお、左様、関東八ヶ国を差し上げましょう。その代わり、三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の五ヶ国を貰い受ける」

「何と、今の領国を召し上げる」

「流石の家康も顔色を変えた。秀吉は涼しい顔で、

「関東は東の要。この国の東を家康殿に治めて頂き、私は西国を治めます。二人でこの国を平和に致しましょうぞ。はははは」

これを論功行賞と取るか、左遷と取るか。故郷の三河だけでなく、あれ程欲した駿河、甲斐を手放さねばならぬとは、家康は臍を噛んだ。

断固拒否すべし。重臣たちの中には強硬論も出たが、北条討伐二十万の軍勢を見せ付けられて、勝てる見込みは万に一もない現状であった。

「またしても我慢の時か。やむを得ぬ」

家康は関東移封を受け入れて、江戸に移っていった。

天下人となった秀吉に吉報が舞い込んできた。

側室淀の方が、淀城にて男子出産。秀吉は躍り上がった喜んだ。正室寧々、北政所に子ができず、秀吉は世子を諦めていたのだ。

「おっひゃあ、嬉しきかな。世継ぎじや世継ぎじや、世継ぎが生まれたぞ」

「殿下、おめでとうございます。これで豊家の行く末、万々歳にござります」

側近石田三成と千利休が祝辞を述べた。

「おお、治部よ、利休よ、喜べ。でかした、でかしたぞや淀。お茶々」淀の方とは、浅井長政の三人の娘、長女の茶々である。嘗て母のお市の方に横恋慕していた秀吉は、亡きお市の方に似て美形の茶々を、側室にしていたのであった。

またこの時、治部と呼ばれた石田三成は、従五位治部少輔に叙位されていた。

秀吉は生まれた男子に鶴松と名付け、捨て子は強いという言葉伝えから、捨丸と呼んで可愛がった。

天下人となり、功成り名を遂げた秀吉の、今が絶頂期といえた。

そんな秀吉のもとに、隣国朝鮮国王から特使が遣わされ、大坂城にて秀吉が謁見した。

「この度は日本国統一されました事、誠に祝着にございます。ここに貴方様を日本国王と認めます」

友好の証の言葉が伝えられた。最初秀吉はこれを喜んだのだが、「はて、わしを日本国王と認める、とは何事か。わしの上には天子様がおわす。そうじゃ、我が国には帝がおわす。帝をないがしろにする、かの国を懲らしめねばならぬ」

あくまでも隣国同士の友好辞令であったが、秀吉の慢心からくる勘違いが始まった。

「わしは古い先短い。わしの目の黒い内に『韓入り』せねばならぬ。韓だけではないぞ、明国にも攻め入る。兵馬を整えよ。渡海じゃ、

『唐御陣』の準備をせよ」

これには大納言秀長が慌てて止めた。

「恐れながら言上仕ります。かの国は和平を求めているのです。関白殿下のお力でようやく天下を治めし今、ここは国政に目配りなされるべきかと存じます」

そして、側に仕える千利休も、

「大納言様のお言葉には、無辜の民の声が、重さとなって響きまする」

秀吉は二人の意見をきいて、

「ううむ」

と考え込んでしまった。

この時を境に、少しずつ豊臣秀吉に翳りが見え始めてくるのであった。

天正十九年、豊臣権大納言秀長が病死した。

秀吉の弟で、戦上手、誠実な人柄で諸大名からも尊敬されていた。

秀吉の直臣からも信頼厚く、秀吉の補佐役として豊臣政権確立に多大なる貢献をした。

関白秀吉が最も頼りにする人物であった。

「大和大納言よ、秀長よ、何故わしより先に逝くぞ。捨丸はまだ幼い。そなたに後見して貰うつもりであったのに……」

悲嘆に暮れているところへ、追い討ちを掛けるように、その捨丸こと鶴松が病を得て急逝してしまった。

秀吉の落胆はいかばかりか、連日嘆き、悲しみ、すっかりやつれ、

見た目にも分かるほど急に年老いてきた。

秀吉は、自分にはもう子はできぬと諦めてしまった。

世継ぎが無くなつては豊臣政権は一代で終わる。秀吉は己が老い先短いことを考え、豊臣家後継を急いで決めた。

甥の秀次を左大臣に叙進させ、関白の位を譲り、自分は隠居し、関白隠居の唐名、太閤を名乗ったのである。これより聚楽第には秀次が入った。秀吉は伏見に城を構えることにし、やがて居館ができるとそこに移っていった。

だが、太閤になってからも実権は秀吉が握っており、全ての政務は相変わらず秀吉が行っていた。

太閤秀吉は石田三成に堺の代官も兼任させ、堺の街の壕を全て埋め立て、商人たちの半分は大坂に移転するよう命じた。

堺の利権を奪い、直轄地と定め、海外貿易を秀吉が一手に支配しようと考えたのである。

堺の街は仰天した。街を取り仕切る豪商の中心団体、三十六人で構成される会合衆えいごうじゆうが集結した。

太閤に仕える千利休は、京都から抜けられず欠席であったが、今

井宗久、津田宗及の二人は出席していた。

会合衆の中で、納屋衆と言われる一門の代表、納屋助左衛門が壕埋め立てに反対し、大坂移転の抵抗勢力の代表格にのし上がった。

これに対して、今井宗久、津田宗及たちは、堺商人半分大坂移転の命に従うべし、と納屋衆に異を唱えたのである。

「魚屋さん。太閤殿下に逆らっても敵いません」

別称魚屋、呂宋 助左衛門との異名を取る納屋助左衛門に、今井宗久は落ち着いた声で話した。

「魚屋さん、昔と違って今の堺には、立ち向かう力がありません。ここは辛抱して少しでも生き残れる方法を取りましょう」

今井宗久の意見に同調して津田宗及が、

「太閤殿下の寵愛を受ける千利休さんに、ここは何とか頼むしかありません」

と説得した。

すかさず納屋助左衛門が叫ぶように、

「しかし利休さんは最早、堺の会合衆ではありませんぞ。一茶人となられています。堺の事はもう見捨てる心境かも知れません」

今井宗久がなだめるように、

「千利休さんはあくまで堺の人です。堺を見捨てたりは決してしない人です」

と言い切った。

堺の民から「呂宋助左」の異名で慕われるこの貿易商は最後まで強硬に反対したが、会合衆全体の流れで、千利休にとりなして貰うしかなし、と意見がまとまった。これしか手はないのか、諦めが堺衆に浸透していった。

伏見城で、太閤秀吉は毎日落ち着きの無い毎日を過ごしていた。日々、老いを感じ、何か不安なものが身体中を包んでしまうようであった。関白を譲った甥の秀次の、不行跡ばかり耳に入ってくる。

「愚かな奴、あやつの不行状は始末に負えん」

失望していたのである。

まだ未完成の伏見城は、大坂城ほどの規模ではないが、それでも天下の名城となる事は間違いない。だが今の秀吉の心を満足させるものではなかった。

そんな時、側近の石田三成から、千利休の不遜な行動を知らされた。

堺衆が街の分断に不満を持ち、壕の埋め立てを拒否しようとしたこと、また千利休が自分が太閤様に何とかとりなすから、逆らわずに従えと抑えていること、事実なのだが石田三成の話しようで秀吉の耳には曲解されて聞こえた。

「付け上がるな利休」

秀吉は腹が立ってきた。

今や千利休は、禁中茶会、北野神社大茶会の成功で、天下の茶聖の名声を得ていた。

茶道の道具類、絵画、工芸、茶室の建築など、茶に関わる全ての芸術に於ける利休の地位は、秀吉とは別世界の天下人であった。

現に茶道では、太閤秀吉は千利休の弟子である。諸大名も利休に茶道の教えを受け、利休七哲と言われる高弟の中にも、大名が名を連ねていた。

千利休は親交のある大徳寺住持、春屋宗園の再三の願いを受け入れ、山門の上に自分の姿を模した千利休木像を祀ったのであった。

これが事件となった。

大徳寺は京都の名刹である。寺内には秀吉が造営した織田信長公を祀る総見院寺もあった。

秀吉も時に参内するが、山門をくぐる時、その頭上に利休の木像が祀られているのである。つまり利休の足元を天下人秀吉がくぐることになる。これは不遜であると石田三成は秀吉に報告した。

秀吉は激怒した。

「利休を呼べ」

召し出されて面前に平伏する利休に、

「利休よ、そちは近頃慢心しておるな」

秀吉は大徳寺木像の一件を先ず詰問した。

「畏れながら申し上げます。あれは寺内の書院に置かれる筈が、いつの間にか山門に上げられしもの。私も当惑しておりました。御不興の段、平にお許し下さりませ」

と利休は深々と頭を下げた。

次に秀吉は堺の街、解体反対者の処置について尋ねた。

「さ、それは、私も堺で生まれ、堺で育った者、堺を去るのは寂しゆうござります。しかし、殿下の仕置きに反抗するものではありません。せぬ。堺の商人たちの身の立つご処分を切望するものにござります」

「利休よ、武人ではないお前が、茶の道一筋で今日こんにちの地位まで登りつめたのは誰のお陰ぞ」

「ひとえに殿下のお力によるものにござります」

千利休の返す言葉に隙は無かった。

「そちは、わしの茶道の好みを無教養とか申しておるそうな」

「滅相ありません。私の選りしものをお取り上げ下されぬことがあつても、これは殿下と私の見方の違い。これに気付かぬ私が愚かにござります」

「その通りよ、人はそれぞれ好みがある。それなくして人に非ず」

「ご教訓、身に浸みましてござります」

「最後に尋ねる。わしは近々韓入りする。これを何とみる」

「韓入り、朝鮮国に出兵でしょうか」

「おお、朝鮮を平定し、明、天竺まで兵を進める。やがて天子様を

明の都にご案内奉るのじゃ」

「亡き大和大納言様は、いまだ諸国に配備されし大名方が領国治政ならず、その時ではないと進言されましたが」

「あの時はそうであったが今は違う、そちはあの時と同じに反対するか」

「私は一介の茶人、政まつりごとに反対も賛成もありません」

「申したな利休、一介の茶人なれば何ゆえに大徳寺に己の木像を寄

進致す。堺の商人たちに大坂に参れという折角のわしの温情に、何ゆえ口出しするのか。おお、今だから申すが、わしが参る事を承知の上で、そちの造りし茶室にはなぜに金色や赤を使わぬ。ええい、一介の茶人よ、唐御陣にも大納言の名を借りて反対致すか」

秀吉は顔を真っ赤にして烈火の如く怒った。

利休は平伏してひたすら詫びた。

「増上慢の頭を冷やせ。暇を取らず、堺にて蟄居せよ」

秀吉は利休の名声が高まることに嫉妬していたのである。自分が卑賤の出である事が、生涯の劣等感となって重くのし掛かっていた。

無教養、浅学、これは秀吉自身が誰よりも分かっていた。

秀吉は諸大名も弟子入りするほどの芸術家、最高峰となった利休に、蟄居を命ずる事で自分の権力を見せ付けようとした。

——わしは卑俗の出である。だが誰よりも民意、人心の機微が巧みに掌握できる。昼夜、学問、芸道に励んで天下が取れるものか。

しかして政務は無学の者にはできぬ。それゆえ、側に治部ちぶのような利
け者を置いているのだ。

蟄居を命ぜられ、堺に舟で下る為に淀川の渡しまで来た千利休は、

見張りの兵士の後方に、自分を見送る二人の武人に気がついた。

兵士に気付かれぬよう、もう一度ちらつと見る。

古田織部正重然と細川三斎忠興であった。

大名の二人は、七哲と言われる利休の高弟である。二人共釣竿を提げていた。たまたま釣に来て師を見かけたという擬態であった。

二人が自分を見送りに来た事を、太閤殿下に咎められてはまずいと、利休は顔を合わさず、声も掛けなかった。心の中で二人に別れを告げた。

古田織部も細川三斎も、ひよつとしてこれが最後の別れになるやもしれぬと感じていた。

伏見城で秀吉は、利休を懲らしめるのは、ここまででよいと考えていた。だが石田三成が、千利休の死罪を進言したのである。

「利休を殺す。訳を申せ」

「畏れながら千利休はもともと堺衆、刃向かう者たちの頼る元であります。堺を解体するには利休を切ったほうが事は簡単に進みまする」

「茶道は如何致す。天下の茶聖となった利休の代わりはおらぬぞ」

「古田織部正は如何かと。また、織田有楽齋殿もおられます。所詮千利休は町人の茶、ここは殿下直々の御下命にて大名の茶、いや武門の茶を確立されては如何かと存じます」

「ふうむ、天下人の茶、武士道の茶であるな」

秀吉の顔に満足そうな笑みが浮かんだ。

少し沈黙が続いた後、

「利休は打ち首かのう」

「畏れながら、利休の高弟には諸大名のお歴々も多くおられます。

ここはその方々のことを慮おもんばかつて、切腹をお申し付けなさるのが良いかと」

「利休は武士ではないぞ。切腹は如何なものか」

「あいや、武人の作法にて死を与える事、これが全て事無きを得る方策かと愚考致します」

「よし、分かった。利休を堺より聚楽屋敷に移し、そこにて切腹させよ」

早速、堺に太閤秀吉の下命を受けた使者が着いた。

千利休は従容として動ずることなく命に服した。

堺を発つ前、千利休は親しかった数名の友人を招き、別れの茶会

を開いた。

今井宗久、津田宗及、納屋助左衛門もいた。

席亭の利休は淡々と茶を点て、数寄の雅を楽しんだ。客の全ても、何事も問わず語らず、千利休の侘び茶の心構え、一期一会に心魂を込めた。雑念を払い、心気を静め、一服の茶に情感が込められた。

茶会が終わり客が帰った後、深夜、庭に人影が立った。

気付いた利休が障子を開けると、月影が男を照らし出した。

「千四郎さん」

「利休様、お別れにひと目、夜分も弁えず参上しました」

「よう来られました。さ、上がりなさい」

千四郎を招じ入れた。

大坂城で再会してから、千四郎は数度利休の京屋敷を訪ね、利休から侘び茶の手ほどきを受けたのであった。

利休は千四郎に、切腹の命を受けるまでのいきさつを簡単に話した。そして利休は語り続けた。

「太閤殿下を悪く言ってはいけません。織田信長様の遺志を継がれ、天下統一を成すのはあのお方にしかできぬ事だったのです。あのお方は途方もない人です。我々には及びも付かぬ人です。雷神のよう

な大きな風袋を持って風を起こし、嵐を呼び、力づくで戦乱を治めたのです。そんな殿下に私は敬意を払っていました。ですが、茶の道を昇華せんと日夜励む時、いつの間にか殿下の趣味の違い、目筋の違いに、私は愚かにも、蔑みの心が生じていたのです。俗界の間が物事を極めようとするに、人を蔑む心を持っては成し得ません。私が愚かでした」

静かに語る利休の目が光った。

「殿下の申される通り、私は慢心していたのです。天下の茶聖などと持て囃された私に、殿下は鉄槌を下されたのです。たとえそれが嫉妬や僻みであつても、私には正しい仕置きなのです。織田信長様は本当に偉大な人でした。あの太閤殿下の出自や無教養さも楽しまれ、可愛がる大きな心をお持ちでした。蔑みなど少しも無かったです。私や明智光秀様はここが違いました。殿下を心中蔑んでいたのです。殿下から死を賜り、私はこれで自分の心が洗われる気がしました」

千四郎は死に行く千利休に掛ける言葉もなかった。涙が頬を伝つて落ちた。

別れの最後に、

「私如き者に、茶道を御教示下さり衷心より御礼申し上げます。御恩、生涯忘れませぬ。お心安らかに参らせませすように」

「千四郎さん、後世に残る城、あの世にて見守りますぞ。これにてお別れします」

千利休は明るい声音で千四郎に別れを告げた。

京に護送された千利休は、聚楽第の屋敷内にて切腹し、七十歳の生涯を終えた。

千利休の首は、一条戻橋に梟首されたという。

元号が変り文禄元年、太閤秀吉は突如、唐御陣を発令した。

朝鮮を滅ぼして明に攻め入るといふ、途方もない暴挙であった。

「何の為ぞ、太閤殿下は気が狂われたか」

徳川家康は呆れた。

秀吉は肥前名護屋に軍兵渡海の前線基地となる築城を命じた。

穴太衆石切千四郎も駆り出された。息子の小四郎は付いて来たが、つたが、千四郎はまだ早いと残したのであった。

肥前名護屋の出城ができて、太閤秀吉は徳川家康と共に入城した。

そこに悲報が届いた。秀吉の母、なか大政所の死去の報せであった。

家康に進軍の指示を任せ、秀吉は大坂城に夜を継いで急ぎ舞い戻った。

秀吉は母大政所の葬儀を終えてのちも、悲嘆に暮れていた。

秀吉の命を受けて渡海、韓入りした軍団は、破竹の勢いで敵を打ち負かし、加藤清正、小西行長、鍋島勝茂など先鋒軍は二手に分かれ首都漢城、平壤まで進攻した。この後、さらに明の国境まで迫ったのである。

肥前名護屋城に戻った秀吉は、戦勝の報せが入る度に狂喜した。

「余も韓入りするぞ。やがて明国も攻め滅ぼし、天子様の御料地とせん。やれ進めや」

だがここまですであつた。戦況が変つてきた。敗退を重ね、追い込まれた朝鮮軍は、隣国、大明に救援を求めたのである。大明はこれを受けて大軍を朝鮮に向かわせた。

大明、朝鮮の連合軍はどんどん日本渡海軍を打ち破った。日本軍は平壤を棄て、碧蹄館にてこれを迎撃した。段々戦況不利になる中、小早川隆景、立花宗茂の奮戦で勝利をもぎ取り、かろうじて講和に漕ぎ着けた。

しかし、この講和は数年も経たずにあっけなく破られ、再度朝鮮

出兵が強行されるのである。

そんな時、秀吉に嬉しい報せが入った。

側室淀の方が二人目の男子を出産したのである。秀吉は急ぎ大坂に戻った。

我が子と対面した秀吉は、嬉しさの余り泣き崩れた。

「おお、おお、我が子よ。おお、わしの子」

六十歳になる秀吉は大変な喜びようであった。

生まれた子に秀吉は拾丸ひくいと名付けた。長男鶴松を捨丸すてと呼び、早くに亡くしたので今度は拾丸であった。

そんな中、伏見城が七年の歳月をかけてやっと完成した。

秀吉は伏見新城で毎日拾丸と過ごした。子供の顔を見ると元気が湧いてくるようで、一日中せわしなく城内を歩き回っていた。

やがて秀吉の頭の中に、世継ぎの事が持ち上がった。

——関白位を秀次に譲っている今、この後、わしの目の黒い内に、幼い拾丸に上手く継承できるであろうか。急がねばならぬ。このところ、巷では摂政関白に引っ掛けて、秀次めを殺生関白と呼ぶそうな。あやつ罪の無い百姓や婦女子まで斬殺しておると聞く。さて、どうしたものか。

秀吉は思案を凝らした。そして側近石田三成を呼び付けた。

「治部少輔よ、わしの悩みを汲み取り、良いように計らえ」

石田三成はすぐに配下の者に関白秀次の不行跡を調べさせた。失脚させる為の理由は何でもよかった。不行状の真偽はともかく、このような悪評が立つては不徳の致すところ、太閤殿下の御名を汚す所業なり。こんなところを論って上申したのであった。

秀吉はこれを直ちに秀次家老の木村常陸介に突き付け、秀次に伏見城に来るよう命じた。

秀次はきつと殺されると恐れ、伏見城には来なかった。秀吉はとうとう秀次を聚楽第より高野山に追放した。さらに福島正則を立て人にして切腹を命じたのであった。

関白豊臣秀次は切腹し、二十八歳の生涯を終えた。

さらに秀吉は、

「天下の見せしめである」

と甥である秀次の首を三条河原に梟首した。秀次の重臣、妻子、側室たち二十人も斬殺し、同じく三条河原に晒したのである。

この後秀吉の命により、聚楽第は取り壊され、伏見城に移築されたのであった。

秀吉は幼い拾丸の行く末を案じ、豊臣政権の地盤強化の為に五大老制を決め、その下に中老、五奉行を定めた。

秀吉亡き後も五大老の合議で政治を決定し、五奉行がそれに従い分担して政務を司る。この制度なら拾丸の行く末も安心であろうと考えたのであった。

五大老は、筆頭徳川家康、前田利家、毛利輝元、小早川隆景（死後上杉景勝）宇喜多秀家。

三中老は、生駒親正、中村一氏、堀尾吉晴。

五奉行は、筆頭浅野長政、石田三成、増田長盛、長束正家、前田玄以。

やがて秀吉は拾丸に秀頼と名を付けた。

そして秀頼と淀の方を連れて、伏見城から大坂城に移ることにしたのだが、体調が優れず伏見城に留まっていた。

この頃から秀吉の身体に、老衰が進んでいった。不眠症になり、また眠ると失禁したり、食べ物を吐いたり、どんどん痩せ細っていくのであった。秀吉は焦った。

「これはいかん、治部よ、わしの動ける内に花見の宴の仕度をせよ。」

醍醐寺で花見じゃ」

醍醐の花見。これが伏見城に於ける秀吉最後の盛大な行事であった。

秀吉は秀頼と淀の方の手を引いて、見事な醍醐寺の花見を楽しんだ。

秀頼を抱きながら、秀吉は天命尽きる時が近い事を悟っていた。

幼い秀頼の事を思い、豊臣家の将来に不安を持つ秀吉は、ここに徳川家康以下、諸大名三十名の連署血判を取り、秀頼に忠誠を誓わせた。石田三成たち五奉行もこれに続き誓書を出したのである。

慶長三年、秀吉はもう余命いくばくもない身を悟り、徳川家康を伏見城に呼び寄せ、

「家康殿、秀頼とあなたの孫、千姫を夫婦にして下され。秀頼の父代わりとなって助けて下され。秀頼を頼みます、頼みますぞ、家康殿」

涙を流し家康に懇願した。

家康も秀吉の手を強く握り、

「この家康、万事心得ました。ご安心下さりますように」と力強く答えたのであった。

秀吉はいよいよ最期の時が来たのを悟り、五大老に宛てて遺言状を書かせた。

内容は、くれぐれも秀頼のこと頼みます。立派な豊臣家の主となるよう頼みます。これにて思い残す事なしという文面であった。

慶長三年八月十八日、戦乱の世を治めた英雄、豊臣秀吉は伏見城にて薨去、六十三歳であった。

辞世の句、

露と落ち露と消えにし我身かな 難波のことも夢のまた夢

太閤秀吉は、翌年朝廷より豊国大明神の神号を与えられ、豊国廟に祀られた。

千四郎は太閤秀吉が死んだことを、故郷穴太村で知った。

——不思議だ。松永弾正様も織田信長様も太閤様までも、自分が精魂傾けた居城にて死を迎えることができなんだ。戦乱の世はまだ終わっていないのだろうか。

秀吉の遺言により、これから先、五大老筆頭徳川家康が政務を司るようになった。

先ず家康は朝鮮より軍団を引き揚げることにした。これを受けて

渡海日本軍は撤兵を開始した。それを察知した明朝連合軍は、これまでよりも果敢に攻撃してきた。

泗川に於いて、薩摩島津軍は激戦の末、優勢を誇る明朝連合軍を撃破し、渡海軍を撤退に導いた。この戦で「石曼子」と敵軍に呼ばれ恐れられた島津軍の奮闘のお陰で、朝鮮出兵軍はここに全て撤退完了した。

韓入りしてから七年に亘る不毛の戦であった。

徳川家康は太閤秀吉の死後、天下第一の実力者にのし上がった。

「太閤亡き後は、わしが天下を治める。わし以外には誰もおらぬ」

と腹臣の本多佐渡守正信に決意を述べた。

本多正信は不敵な笑みを見せ、

「仰せの通りにございます。最早天下に並ぶ者なしの御殿、そうでのうては世は治まりませぬ。これは亡き太閤殿下の御遺志でもござります」

と答えた。

この正信は、昔、三河一向一揆が起こった時、主に背いてそれに味方した為に追放され、諸国を放浪したのち帰参が許された経歴があった。

「博多での一件、大変な事態であったようで、殿が行かずに済んでようござった」

「うむ、行くものか。石田三成の窮地の顔が目には浮かぶわ」

「あの男、おおこれはご無礼、治部少輔殿、よく殿の命に従い博多に参りましたな」

「かの者は職務に忠実である。それがたとえ嫌な事でも己の役目なれば必ずやる。石田三成はそういう男だ」

朝鮮より博多に帰還した諸将、加藤清正、鍋島直茂、立花宗茂たちの心は荒れていた。渡海日本軍の軍監の元締であった石田三成との多年に亘る怨恨が噴出したのである。会議が紛糾する事を予想した家康は、太閤殿下亡き今、五大老筆頭の自分が都を離れる事ならず、と言い切った。代わりに五奉行で軍監役の石田三成に帰還兵士を迎える為、博多に向かわせたのであった。

家康の見るところ、同じ五大老は別にして、太閤の直臣たちは、近江系と尾張系に大別されているようである。

秀吉が織田信長から近江旧浅井領を拝領し、大名となり長浜に城を築いた時、それに相応する家臣を急ぎ抱えねばならず、地元から遮二無二家臣を募った。その多くが浅井家の旧臣たちであった。当

然の如く、秀頼の母、淀殿は、父浅井長政の旧臣たちを膝下に集めた。

その中心人物が石田三成であり、同じ五奉行の長束正家、増田長盛であった。

彼らは行政、経済兵站や経理財務に長けていて、近江系文治派と言われる派閥であった。

これに対し、尾張系と言われる武将は、加藤清正、福島正則、黒田長政、浅野幸長、池田輝政たちであった。彼らはいずれも秀吉と正妻寧々が手塩にかけて育て上げた直臣である。主に軍事面で活躍する武将たちであり、太閤亡き後は、寧々北政所が彼らにとって唯一の心の拠り所であった。これら尾張系を武断派という。

家康は当然秀頼が邪魔であった。秀頼が成長し豊家の主として天下人になっては、自分の野心は潰えてしまう。

「正信よ、わしは徹底して尾張武断派の懐柔に取り掛かる」

「それがよろしいかと。今や石田治部少輔の権勢侮り難きなれど、策はいろいろござります」

「北政所に会わねばならぬ。この事だけは其の方らには任せられぬ」

家康は、子に恵まれなかった北政所を大切に扱う事で、尾張系武

断派を取り込み、石田三成一派を排除しようと考えた。

太閤秀吉の遺言の中に、徳川家康は伏見城に入り、天下の政務を司る。前田利家は太閤秀吉正室北政所は、京都阿弥陀峰の太閤

この遺言に従い、淀殿と秀頼は大坂城に移っていった。

一方、大坂城にいた太閤秀吉正室北政所は、京都阿弥陀峰の太閤秀吉廟所をお守りするとして、そこに移り落飾して喪に服した。

秀吉没後の、北政所の正称は高台院湖月尼こげつにであり、淀殿は大虞院だいうぐいんであったが、淀殿はほとんどの院号では呼ばれなかった。

伏見城に入った家康は、北政所改め高台院にせつせと贈り物をし、使者も立て。自身も幾度となく訪ねた。

高台院にしてみれば、夫秀吉がいない以上、天下の実力者が国を治めるのは当然だと思っている。秀吉もそれを承知で家康に後事を託したのである。

——家康殿なら豊家と秀頼殿を悪いようにはすまい。夫秀吉ですら織田信長公の嫡孫秀信殿に岐阜を与え、大納言として身を立ててやったではないか。秀頼殿にもどこぞに領国を与え、保護してくれるであろう。豊家は存続すればそれでよい。

ここは家康に頼むしかないが高台院は考えていた。

また反面、淀殿と石田三成近江衆が、大坂城にて秀頼を擁して豊家を壟断するのは、高台院にとっては耐えられぬ事であった。

豊臣家をここまでにしたのは、秀吉と寧々夫妻の共同一大事業だったのである。

ここに於いて、家康と高台院は利害が一致していた。古希を迎えようとする家康は、先の長い計画など立ててはいられぬ、天下取りの戦はもう始まっているのだ、と自分に言い聞かせた。

織田信長、太閤秀吉、この二人に我慢に我慢を重ねて忍従してきた家康にとって、これは最後の機会であった。

家康は冷静に豊家分裂を観察し、機敏に行動を開始した。高台院に内諾を得て尾張系武断派との縁組を進めていった。

先ず、妻を亡くし独身の加藤清正に家康養女を嫁がせる。次に福島正則の子正之にやはり家康養女を嫁がせる。蜂須賀家政の子至鎮に、これまた養女を嫁がせる。続いてこれは尾張系ではないが同じ武断派の伊達政宗の娘を、家康六男忠輝に貰い受ける。

この事は秀吉の残した私婚禁止令に明らかに背いていた。当然石田三成は家康を糾弾しに掛かった。

「故太閤殿下のお決めになりし条令を、事もあるうに五大老筆頭が

破りしとは、不届き至極」

高飛車な物言いながら、正論である。

石田三成の要請を受け、三長老、生駒親正、中村一氏、堀尾吉晴が家康のもとにやって来て、条令違反を糾明した。家康は、

「そうであったな。相すまぬ、すっかり忘れていた。年を取るとどうもいかん」

とぼけ通して乗り切ってしまった。

天下第一の実力者、所領三百四十万石の太守、徳川家康に面と向かって物が言える武将たちではなかった。

家康は考えていた。近い内合戦が起きるだろう。武断派を味方に付けねば勝ち目が無い。家康は徹底して近江系文治派を叩く決意を固めた。

強敵がいた。加賀金沢城主前田利家である。家康と同じ五大老の一人だが、故太閤秀吉の盟友である。前田利家は豊臣政権存続に命を懸けていて、徳川家康こそ豊臣家最大の脅威であると公言して憚らなかつた。この前田利家が立てば、豊臣恩顧の諸大名は、武断派であれ文治派であれ従わぬ訳にはいかぬ実力を持っていた。

家康は五大老筆頭の政務代官である以上、伏見から動けない立場

であった。なにか事ある時、関東にある家康軍団を伏見に呼んでもとても間に合わない。今、利家が立てば危ない。家康は危機感を持った。

だが天は家康に味方した。

家康討伐を決意していた利家であったが、病を得て臥せってしまった。症状はかなり重く、医師の見立てでは、最早余命いくばくもない身であった。利家の後ろ盾を当てにしていた石田三成は落胆した。

「いずれ大納言様を後背から動かそうと思っていたが、重病でもうすでに手遅れとは、無念」

英傑前田利家は武人として最期はかくあるべしと、愛刀近藤五国光の脇差で腹を切り自害した。

前田利家の死によって榊が取れた武断派七将、加藤清正、福島正則、黒田長政、細川忠興、浅野幸長、加藤嘉明、池田輝政は、最早誰の遠慮もいらぬと、憎き石田三成を急襲した。いち早く難を逃れた三成は事もあるうか、伏見の家康を頼って逃げ込み、保護を求めたのであった。

驚いたのは家康、前田利家亡き後、最大の敵となった石田三成が

懐に単身で飛び込んで来たのである。

「正信、如何に」

「討ちますか」

「それはまずかろう。窮鳥、懐に入ったのだ、これは討てぬな」

「では佐和山に送り届けましょう」

「うむ、だが只では送らぬ。あやつを封じ込む手立てを講じよ」

「ならば五奉行を罷免し、領国にて蟄居と致すのは」

「それが良い、わしが三成に言い聞かせよう。面白くなったな」

やがて武断派七将が家康のもとに押しかけて来た。

「内府殿にお願い致す、かの治部少輔を我らにお引渡し願いたい」

「これは物言いな、諸将方にも申す。治部少輔はこの家康が預か

った。五大老筆頭の名に於いて、直ちに石田治部少輔、五奉行罷免

を言い渡し、近江佐和山にて蟄居を申し付けるものなり。これ以上

治部少輔の身柄を渡せと言い張るならば、これよりこの徳川家康が

お相手致す」

これを聞いた武断派七将は、今味方になってくれる家康の相手は
できぬと、

「あいやそれには及ばず、治部少輔罷免とあらば、我らこれにて引

き上げまする」

と帰っていった。

三成を佐和山に送り届けた家康は、前田利家亡き後を継いで、政務と秀頼の傅育の名目で大坂城に移っていった。

当然のことながら、豊太閤のいない大坂城は活気が無く、暗く寂しい感じがした。家康は天下を取った暁には、この大坂城をどうするか考えてみた。自分が住むか、倅の誰かに与えるか。だが太閤の臨終の顔が目に焼き付いている。この城はやはり太閤の城である。太閤一代で終わらせようか、それが一番良い方法かも知れぬ、と思いを始めていた。

さて次に、淀殿、秀頼母子をどう始末しようか。考えはそちらに移っていった。

豊太閤の廟所にて菩提を弔う高台院のもとに、加藤清正と福島正則が参内した。二人は淀殿の側近のようになっていた石田三成が失脚し、領国佐和山に蟄居したことを、嬉しそうに高台院に報告した。

清正、正則にとって高台院は、子供の頃から可愛がって育ててくれた母のような存在であった。

久し振りに会う二人に高台院は、

「虎之助、市松、二人共内府殿に従いなさい。内府殿なれば豊臣家と秀頼殿を守ってくださしょう」

と言い聞かせた。

一方、石田三成は佐和山城に引っ込んでも、打倒内府に執念を燃やしていた。

彼は豊太閣亡き後もあくまでも忠臣であった。なんとか秀頼公が成人し、名実共に豊臣家の当主として、豊臣恩顧の諸大名の上に君臨することを悲願としていた。

宿敵家康以外の五大老の中で最も頼りとする前田利家が亡くなり、小早川隆景もすでに亡く、毛利輝元は期待できず、宇喜多秀家はその器に非ず、しかし三成は諦めなかった。

先年小早川隆景の死去で後任として五大老の一人に任ぜられた上杉景勝が浮かび上がった。幸いなことに上杉景勝は内府が嫌いである。上杉家筆頭家老に直江山城守兼続がいる。彼もまた主君景勝以上に内府が嫌いであった。

——直江兼続とは旧知の間柄である。兼続と連携して上杉を動かす。この手で行こう。

石田三成は打倒内府の秘策を練っていた。

上杉景勝は越後春日山城五十五万石から、奥州会津百二十万石に転封されたばかりであった。陪臣直江山城守兼続は、家老ながら三十万石を禄していた。これは大名並みである。機略に富んだ名将として世に知られていた。

石田三成はこの直江兼続と密約を取り交わした。

上杉が反徳川を標榜して挙兵の準備をする。家康はこれに反応して上杉討伐の令を発し、自ら討伐軍を率いて関東、奥州に間違いないく下向するであろう。そこで石田三成が豊臣恩顧の諸大名に糾合して兵を挙げ、家康軍を前方上杉、後方石田で挟み撃ちにする大作戦を計画したのである。

家康もかねてより上杉景勝の不穏な言動に敏感だった。五大老筆頭の名に於いて、景勝に上洛を命じた。大坂城にて真意を糾すつもりであった。

上杉景勝はこれを無視して、戦の準備を急いだ。

再三の上洛の命に、家老の直江兼続が家康に宛て書状を送り付けた。

天下に知られた直江状である。

内容は、当家領国移封になった直後にて、いまだ領地整備されず、今のところ上洛はできない、と先ず弁解が書かれており、その後は痛烈なる家康批判が綿々と綴られていた。最後には家康が会津討伐に来ることを予測して、内府様御下向なれば、何時でもお相手仕る。という痛快無比の文面であった。

家康はこれを読み激怒した。諸侯の前で、

「我が生涯、これほど無礼なる書状を受けるは初めてである。太刀をこれに持て」

庭先に出て、愛刀三条小鍛冶宗近を抜き放ち、書状を斬りつけたという。

家康は上杉討伐を天下に号令した。

家康には、石田三成と上杉景勝が呼応して必ず挙兵するという読みがあった。伏見城は、三河以来の家臣、鳥居元忠に守らせる為、千八百の手勢を残した。家康も鳥居元忠も、三成が上方にて挙兵した時には、この城が最初に攻められることを知っていた。三成をおびき出す捨石だった。

家康は大坂城にて淀殿、秀頼に拝謁したのち、会津討伐軍は江戸に集結せよと再び命を發した。

福島正則をはじめとする、黒田長政、細川忠興ら三成憎しの武断派も、軍を率いて江戸に集まってきた。

加藤清正は九州肥後の遠方ゆえ、西国の島津などの牽制として領国にあつた。

江戸に入った家康は三成が挙兵するのを待った。案の定、三成が動いた。三成の盟友、大谷吉継、安国寺恵瓊、小西行長らが西国大名たちに働きかけ、毛利輝元を総大将に担いだのである。

三成は背反防止の手段として、大坂にいる諸大名の妻子を人質に取った。この時細川忠興の妻で故明智光秀の娘玉子（切支丹名伽羅奢）は、人質を拒否して家臣の手で生涯を終えた。

家康は黒田長政を使って、尾張武断派に此度の戦は石田三成を討つのが目的であり、豊臣秀頼公のことは一切関わりなしと説明させた。

三成、上方にて蜂起の報せを受けて、家康は江戸から西に取って返す策を講じた。

これより後方となる上杉の備えとして、次男結城秀康に兵を与え、野州に布陣させた。続いて伊達政宗、最上義光に恩賞を約束して、上杉軍の出撃を牽制した。そして西上する軍団を二手に分けて大坂

に向かった。

家康本隊三万三千は東海道を、三男秀忠には三万八千を与え中山道を行かせた。

尾張清洲城に着いた家康は、秀忠の到着の遅れに苛立った。秀忠軍は途中、信州上田城主真田昌幸に行く手を阻まれた。意地になった秀忠軍を機略に満ちた昌幸が翻弄し、秀忠軍は大幅に手間取り、家康との合流が遅れていた。

「しくじったの。あやつに大軍を託すではなかった」

家康は舌打ちした。

こうなると頼みは尾張武断派の鬪将のみである。家康直参ではない彼らが、命を懸けて味方してくれるであろうか、これはとてつもない賭けであった。だが家康はこれまでにいろいろと手を打っていた。西軍の将にせつせと密書を送り、調略の手を回した。毛利家の重鎮吉川広家には、毛利共々不戦の密約を取り付けた。一方、高台院を通じて小早川秀秋にも味方するように話していた。

石田三成を主将とする西軍は伏見城を落とし、進攻を続け、田辺城、安濃津城、松坂城を次々に落とし大垣城に入った。

どんどん大垣城に集結する西軍を、城攻めが苦手な家康は、機略

を駆使して得意な野戦に持ち込む事に成功した。

ここに東軍十万四千、西軍八万二千、合わせて十八万余の大軍が関ヶ原に集結した。

西軍は石田三成の拠る笹尾山、宇喜多秀家の天満山、小早川秀秋の松尾山、そして毛利秀元が拠る南宮山で、東軍をぐるりと囲む鶴翼の陣を敷き万全を期した。

濃霧が晴れ、関ヶ原天下分け目の合戦の火蓋が切って落とされた。

東軍福島正則隊と西軍宇喜多秀家隊が正面からぶつかり、両者一歩も譲らず。東軍黒田長政、細川忠興隊は西軍石田三成隊に襲い掛かる。劣勢になった三成は、再三にわたって島津義弘隊に参戦を促す伝令を出した。だが、なぜか島津義弘隊は動かなかつた。

これまでの軍議で島津義弘は作戦を提案したが悉く三成に拒否され、それなれば様子見に徹すると状況を見守っていた。

動かず様子を見る武将が他にもいた。小早川秀秋、毛利秀元、吉川広家隊である。

家康は小早川秀秋隊に寝返りを促す威嚇射撃を命じた。どちらに付くか迷っていた小早川秀秋は銃声に驚き、寝返りを決意、松尾山を下り大谷吉継隊に襲い掛かった。

勇猛大谷吉継はこれを予期していた、

「金吾中納言、大恩ある豊太閤を裏切る事、武士にあるまじき外道。許せん」

末期の癪のため失明している大谷吉継は、輿の上から檄を飛ばし小早川軍を迎撃した。

西軍の裏切りは続出した。脇坂安治、小川祐忠、赤座直保、朽木元綱らが次々に西軍を見限っていった。これで戦局は一変した。大谷吉継は戦死、総崩れとなった西軍の最後に島津義弘隊は後世に名を馳せた。島津敵中前進撤退”などで逃走した。

天下分け目の関ヶ原は、東軍の大勝利に終わった。

敗軍の将石田三成は、土民に身をやつし山中に逃げたが、田中吉政隊に見つかり捕縛された。小西行長、安国寺恵瓊も捕えられ、三将は大坂、堺を引き回されたのち、六条河原にて斬首された。宇喜多秀家は薩摩に落ちたが家康の命で引き出され、八丈島に流罪。長束正家は自害して果てた。

大坂城を守っていた西軍総大将の毛利輝元は所領没収となったが、一門の吉川広家が自分の領地、周防、長門を差し出し、代わりに毛利領として認められた。

上杉景勝は会津百二十万石から、家老直江兼継の領地米沢三十万石のみに減封された。

他に主だったところ、長曾我部盛親は所領没収、佐竹義宣も秋田十八万石に減封された。

意外や島津義弘はお咎めなし、所領安堵となったのである。

勝利した東軍の諸大名は、それぞれ大幅に加増され太守となった。

しかし伊達政宗、最上義光を除いて、いずれも外様大名として西国方面に移封となった。

徳川家康は太閤時代の二百五十万石からなんと四百万石となったのである。

方や豊臣家は大幅な減封を余儀なくされ、たったの六十五万石に成り下がり、支配していた堺、博多、長崎も家康の直轄地となった。

徳川氏と豊臣氏はこれで完全に立場が逆転したのであった。

大坂城に凱旋し、西の丸に入った徳川家康は、秀頼公後見人として居座り、まだ残る関ヶ原勝者の論功行賞、敗者の仕置きを実行していった。その後はこれ見よがしに公卿、商人、僧侶などの戦勝祝賀を受けて、本丸にいる淀殿と秀頼母子に実力を見せつけた。

淀殿、秀頼たちは、此度の合戦は豊臣の家臣同士の私怨の戦として受けとっていなかった。為に石田三成が成敗された、とだけ思っ
て、天下の情勢には全く鈍感だった。秀頼の傅役だった前田利家が
亡くなり、代わって片桐東市正且元が傅役兼家老に就任した。

家康は片桐且元を呼び、

「且元殿よ、豊臣家の今のお立場を貴殿から淀殿によく教えられよ」と穏やかに伝えた。

淀殿は聞き入れるどころかいきり立った。

「徳川氏はいまだ豊臣の家臣であろう。且元、秀頼殿の御領地はいかほどののか」

「畏れながら申し上げます、六十五万石にござります」

「なんと」

一介の大名に落ちてしまった現状を理解できずに怒り狂ってしまった。
った。

片桐且元は、

「これは秀頼様まだ御幼君であらせられる、その為の内府殿の御配慮か」と

「何の為ぞ」

「石田三成の如き世を乱す者、また現れぬとも限らず、為に内府殿がお預かりしているものと考えます」

「では秀頼殿が御成人あそばしたのちは、元の領地に戻すというのか」

「御意」

且元はこう言つてとりあえず淀殿をなだめるしかなかった。

慶長八年、徳川家康は朝廷より征夷大將軍の任命を受けた。

家康は嘗て源氏を公称していたので、秀吉のように無理やり公家になり、関白として天下を治める必要がなく、武家の棟梁として江戸に幕府を開く事を許されたのである。

朝廷への返礼の帰途、二条城に入った家康は高台院に使者を送り、丁寧に招待した。

この頃、高台院は豊太閤の廟所を離れ、京の三本木に移り、太閤の菩提を弔いながらひっそり暮らしていた。丁度、高台院の方も家康に話す事もあり、招待を快く受けた。

「この度は將軍宣下の事、誠におめでとうございます」

「ありがとうございます。これもひとえに高台院殿の御尽力の賜物、家

康衷心より御礼申し上げます。この身にできることあらば遠慮のう
お話し下され」

「ありがたきお言葉、それに甘えて少しお話がございます」

「おお、伺います」

家康は満面に笑みをたたえて言った。

征夷大將軍とはいえ、家康はまだこの時官位内大臣であり、高台
院は朝廷より歴とした従一位を賜り家康より格上であつた。尊大な
言葉遣いはできぬ立場である。

「大坂の秀頼殿の事、何卒よしなにお計らい下さりませ」

「秀頼殿はこの家康に任せられよ。成人したのち、しかるべき地に
て安住にお暮らしなされるように致します」

つまり言い換えれば、大坂城は母子共に出て貰うということでも
あつた。

聡明な高台院はそれに気付いてはいたが、秀頼と淀殿にはそれで
充分であろうと思つていた。江戸に幕府が開かれる以上、秀頼の、
天下人としての将来は絶望であつた。

「石田治部少輔の男子は、武門の習わしにて死罪は免れぬと心得ま
す。しかし私が預かりし三女お辰は助命をお願いできぬものでしよ

うか」

「畏まってござる。石田三成の子重家は仏門に入りし身、仏に帰依する者を徳川は討ちませぬ。また御養女のご安んじませぬよ」

「御厚情ありがたく存じます。もうこれ以上お願いはありません」

と高台院は深く頭を下げた。

「この家康、天下を治める身になりましたのも、ひとえに高台院殿が、太閤殿下恩顧の諸将に口利きあつてのこと。なにかお礼がしたい。この京に高台院殿の寺を建てるは如何か、この家康、全て取り計らいますぞ」

「寺を、なんと嬉しいこと」

高台院は素直に喜んだ。

高台院を見送った後、家康は考えた。自分もそう長くは生きられぬ。大坂城にいる淀と秀頼は早いところ始末せねばならぬ。それには豊臣恩顧の大名をまだまだ味方に引き付けておかねばならず、高台院は大切に扱わねば、と思っていた。

また淀と秀頼が大坂城立ち退きを拒否すれば、合戦は必定、命の保証はしかねることになる。高台院との約束も反故になり、後ろめたさもあつた。

この他にもう一つ、家康の本心があった。太閤秀吉の祀られる豊国廟所が邪魔であった。自分の次の代まで存在してはならぬ。自分の死後、豊臣恩顧の諸大名が象徴としてこれを崇めては、將軍徳川家の権威に関わる。やはりいつか取り壊さねばならぬ。このこともあつて、高台院の為に、京都に寺院を建ててやろうと考えたのであつた。

家康は二条城滞在中に穴太衆石工頭石切千四郎を召し出した。千四郎とは小田原北条征伐の時、石垣山出城で太閤が召し出して家康に引き合わせて以来であつた。その時太閤は自慢げに、大坂城普請はこやつの手柄と褒め上げた。

千四郎と一子小四郎が家康に拝謁した。

千四郎はこの時すでに石工頭を息子小四郎に譲っていた。小四郎は二十五歳の逞しい青年になっていた。

「千四郎、江戸幕府を開くに当たり、今ある江戸城を大きく改修することになった。ついては其の方たち穴太衆に働いて貰わねばならぬ。よいか、今ある大坂城を遙かに凌ぐ天下まづかし政の要城である。心して築城の労を取れ。恩賞は多大のものになるぞ」

「畏れながら言上仕ります。石工頭の役はこの倅小四郎に継がせております。また技能はでき得る限り伝授してあります。此度の大任、何卒倅めにお申し付け下さりませ」

「ふむ、それはよいが、若年の事ゆえしくじることはあるまいな」

「穴太衆、老練の技能工が常に付き従い、間違いなき仕事をさせまする」

家康はじつと千四郎を見つめた。何か感じたようである。

「其の方の、早き引退の訳を申せ」

「ご不快になられる話にて、その儀は」

「構わぬ、聞こうではないか」

「されば、私がこれまでに手がけた城、数多くござりますが、いずれも焼失しております」

「そうであるか。乱世なればやむを得ぬこと」

「はい、特に天下一と言われた多聞城、次の天下城は安土、いずれも灰燼に帰しました」

「うむ、その次の天下城は大坂城であったな。其の方、大坂城も焼け落ちると見たか」

「いえ、滅相ありません。ただ私めの関わる城は不吉にて、後世

に残るような城はないと、そんな気が致します。それゆえ、早く倅小四郎めに家督を譲りました」

話を聞いていた家康は、ふと思いついたように、

「相分かった。江戸城改修普請は小四郎と穴太衆に命ずる。爾来、普請奉行のもとに付いて労を取れ」

「ありがとうございます。石工頭の名に恥じぬよう励みまする」

と小四郎は目を輝かして喜び答えた。

「さて、千四郎よ、城ではなく寺ならどうじゃ」

「は、寺院でございますか」

「前の北政所、高台院殿の為に、京の東山に壮麗なる寺院を造営して進上する。太閤殿下の菩提を弔って頂く為である。その寺院の基礎を其の方に申し付ける。よいな」

「これは」

一瞬間をおいて、

「はい、承りました」

と答えた。

高台院と聞いて千四郎は、北野大茶会の後、参内した大坂城山里御殿での、屈託のない明るい笑顔を思い出した。

二条城にて將軍家康の命を受けた後、千四郎は小四郎に、穴太衆の選りすぐりの石工たちを連れて江戸に下向するよう指示を与えた。小四郎と別れてから、自分は東山に造営される高台寺の使役の為、高台院の館を訪ねた。

「おお、これは珍しい、いつぞやの石切千四郎殿」

孝蔵主であった。

「お懐かしゅうござります、その節は何かとありがとうございます。孝蔵主様には御健勝の事、お慶び申し上げます」

挨拶が終わると千四郎は、孝蔵主に館内奥の院に案内された。

前北政所、今正式には高台院湖月尼公は千四郎を見て大いに喜んだ。

「左様ですか、家康公は穴太衆千四郎たちに寺普請を命じられましたか。大坂城といい高台寺といい、よくよく穴太衆とは縁が深いことであります」

千四郎の為に茶を点てながら高台院は語った。その後楽しい団欒が続いた。

やがて話が少しそれてきた、傍らに控える孝蔵主が、

「豊臣家と徳川家がこの先、仲良く続いてくれることを祈ります」
と千四郎に言い、

「世間の噂ではいずれ近い内、戦になるだろうと言われていました」
と続けた。

「そんなに険悪ですか」

と千四郎が尋ね、

「はい、その元は淀殿。あのお方は世間知らず。今置かれているご自分の立場が見えていないのです。そしてお気が強い」

高台院は孝蔵主の話を黙って聞いている。

「大坂と関東が戦になれば、豊臣家の諸大名は大方征夷大將軍家康公に味方されるでしょう。秀頼様の御為にも戦を避けねばなりません、淀殿は意地を張り過ぎるのです。戦になれば大坂城に籠り、関東軍を迎え撃つことになります。大坂城は難攻不落、兵糧も有り、蓄財も潤沢なれど、先はどうなるやら尼僧の私には読めません」

「お気持ちちは分かります。如何に大坂城が堅牢無比でも、今の徳川様のお力は強大です、城は落ちるやも知れませぬ」

千四郎は思わず正直な感想を洩らした。そして千四郎はこれ以上会話を続けてはまずい事になると感じ、高台院のもとを辞した。

將軍家康は江戸城とその城下町造りの為、諸大名に賦役を課した。

將軍として命令系統をはっきりさせる必要があったのだ。

豊臣家は一大名に成り下がり、天下に号令するのは將軍家康ただ

一人。国内、国外にもそれを浸透させねばならない。

「正信よ、せめて百年は徳川の世でありたいものだ」

「なにを仰せられます。百年ではたかだか三代、三百年、いやそれ以上、末代まで続かねば天下泰平の世とは言えませぬ」

「それにはわしの後、豊臣の世はもう無いことを世間に示さねばならぬ。將軍の座を早めに譲ることになるな」

「畏れながらお伺い仕る。讓位とは秀忠様にでしょうや、また結城秀康様に」

「順序なれば秀康であろうが、あやつは太閤の養子でもあった」

本多正信はかねてより、内心秀康を推していたが口には出さずにいた。

家康はきつぱりと声を張り上げた。

「將軍職は秀忠に譲る。朝廷に奏請する手続きを取れ」

慶長十年、家康は將軍の座を三男秀忠に譲り、自分は辞したのち

將軍引退の尊称、大御所と称した。

淀殿は全てに怒っていた。豊臣の家臣が將軍となり、またその子秀忠が二代將軍の座に就いた。豊臣家の望みは絶たれたのである。

大御所として駿府城にいる家康は、秀頼と淀殿だけは自分が命ある内に始末せねばならないと決めた。

家康は、自分が將軍になるまでは新年の賀を述べる為に大坂城に来て秀頼に拝謁していた。これは豊臣恩顧の諸大名のことを考慮に入れていたからである。関ヶ原も彼らの働きで確かに勝利を得た。だが將軍になってからは、立場が逆転した以上、秀頼が拝賀の礼に京に来なければならぬ。

「京に参られよ」

家康は豊臣家に命じたが淀殿は頑として受けなかった。それどころか再三に亘る家康の、

「そちらから拝賀に来られよ」

と脅しとも取れる言葉に、益々意固地になっていた。

「秀忠は新將軍である。京にいる間に將軍かこのわしに拝謁せよ。

このわしとて太閤殿下に上洛して臣下の礼を取ったではないか。これは豊家の御為である」

片桐且元では埒が明かず、高台院を通じて勧告したが、淀殿はこれをも黙殺した。豊家恩顧の大名たちも動いた。このままでは豊臣家存続の危機と察した加藤清正が、懸命に淀殿を説得した。

とうとう淀殿は、秀頼には加藤清正が付き添い、福島正則が護衛の兵士を京の八幡まで配し、高台院が御同座という条件で渋々承知したのであった。

大御所と秀頼の二条城での対面が実現した。

対面は形式通り行われた。位階は家康と秀頼は同格であった。これにより二人は左右に向かい合って座し、横に高台院が座った。

高台院は歴とした従一位で豊臣吉子の姓を朝廷より叙位されている。格の上では家康、秀頼より上位であった。

対面を無事に済ませ、二条城を辞する秀頼を大御所家康は丁重に見送った。

家康はひとまず満足した。秀頼が拝謁したことで、將軍家徳川の臣下の一大名という立場が世間に確立したはずであった。

「正信よ、秀頼は暗愚と聞いていたが、なかなかの偉丈夫である。これは困った」

「やはりいずれば、荒事にて決着となりましょうや」

「成人すれば豊家恩顧のやつばらがうるさい。先ず大坂城の財力を失くす手立てを考えねば」

次の手として家康は太閤の遺産、金銀を吐き出さすことに腐心した。折しも秀頼が天然痘に罹ったのを受けて、高僧を通じて淀殿の女官長大蔵卿局に、死霊が取り付いた為に天然痘になられた、天下に朽ち果てた神社仏閣の再興を囃られよ、さすれば完治されるであろうと吹き込んだ。まんまと囃にはまった。

淀殿は側近の大蔵卿局の話信じてしまった。有り余る金銀を使って畿内一円、遠くは出雲の地まで、豊臣右大臣秀頼建立の札を立てて寺社修築の費用をばら撒いたのである。

「豊太閤の遺し金銀、どれ位のものか」

家康は今更ながら大坂城にある蓄財に驚いた。そこで片桐且元を呼び、

「故太閤殿下が造営されし京の大仏は、先の伏見大地震で倒壊されたままでござる。定めしお嘆きの事であろう。秀頼殿が御遺志を継がれてはどうか、是非方広寺を再建あれ」

とそそのかした。

淀殿はこれも秀頼の為であると信じ、太閤追善の大仏を建造する

ことを受け入れた。

この年、大御所家康はまた強運に恵まれた。豊家恩顧の大名たちが次々に亡くなっていたのである。

先ず家康が恐れる豊家の忠臣加藤清正が病死。続いて浅野長政、幸長父子、堀尾吉晴、池田輝政たちが亡くなってしまった。

「正信、やりやすくなったぞ」

家康は豊臣家を滅ぼす方策を練った。そして世に伝わる方広寺鐘銘事件が起きた。

方広寺大仏殿の梵鐘に刻まれた文中に、

国家安康、君臣豊楽、子孫殷昌

という文字がある。国家安康とは家康公の名を分断している、つまり首と胴を切断したということである。また君臣豊楽、子孫殷昌とは豊臣の君子が子孫まで安楽ということである。これは徳川家に対する呪詛、調伏である。とんでもない言い掛かりをつけた。驚いた豊臣家はすぐ家老片桐且元とこれを撰文した高僧清韓を駿府の大御所のもとに走らせ、決してそのような文ではなく、他意もありませんと必死に説明した。

「秀頼殿はこの家康を、呪い殺したいのであろう」

家康はこう言って弁解を撥ね付け、

「かくなる上は謝罪の証を見せよ」

と且元に三つの条件を出した。

- 一、淀殿を人質として江戸に参らす事。
- 二、豊臣右大臣秀頼殿は大坂城を出て他国に移る事。
- 三、右大臣秀頼殿、関東に下りて將軍に和を請う事。

大坂城に戻った且元からこれを聞き、淀殿は激高した。今の淀殿には到底受け入れられぬ条件であった。この後、副使として駿府に送り込んだ大蔵卿局が戻って来た。彼女の報告では、すっかり誤解は解けて、大御所は上機嫌であったという。家康の硬軟使い分けた策に淀殿は、はまってしまった。内紛が起きた。淀殿は家老片桐且元が大御所に内通していると疑い、大蔵卿局とその側近たちと謀り、城内で切腹させようと呼びつけた。だが且元は大蔵卿局と周りの不審な動きから、身の危険を察知して、一族を連れ大坂城を去ったのである。

家康は自分の計画通りになったことに満足し、気の毒な片桐且元をすぐに駿府に呼び、臣従させた。

そしてとうとう大坂討伐の軍令を発したのであった。

慶長十九年、大坂冬の陣の始まりである。

大御所家康が諸大名に命じて動員された兵の数は三十万以上であった。豊臣恩顧の諸将たちは悉く関東方に参陣した。これに対し大坂方は片桐且元の後にか老になった大野治長、他に木村重成、あとは全国から集まった牢人たちである。関ヶ原で敗将となった旧大名とその家臣などが多く集まって来た。真田左衛門佐幸村、後藤又兵衛基次、長曾我部盛親、毛利勝永、明石掃部全登、薄田隼人正兼相、塙団右衛門直之など勇名を轟かせた武将たちが続々と大坂城に入った。これで大坂西軍は十二万以上の兵士で膨れ上がった。

戦はあっさりけりがつくと思われたが、大坂方歴戦の猛将たちの善戦健闘で、なかなか家康の思い通りには進まなかった。

「これは手強い。やはり大坂城は難攻不落と言うだけはある。ここは機略でいくか」

野戦の名手、家康にしてみれば、やはり城攻めは苦手であった。

ここは一旦講和し、城の内堀外壕を埋め立てる事を家康は思いついた。

大坂城の軍議では、戦況は我らに有利である、講和には応じるべきではない、と真田幸村、後藤基次などは断固反対した。淀殿もこ

れに同意して関東方に通達した。講和拒否と聞いて家康は、よし、それならばと得意の恫喝作戦に出た。

「正信、南蛮の大砲を天守閣に向けて撃て」

三門の大砲が一斉に発射された。その一弾が天守閣の柱に当たった。

この威嚇が功を奏した、淀殿と侍女たちが凄まじい轟音に恐れおののき、家康の講和に応じてしまったのである。

講和の条件は、次の二つ。

大坂城の外濠を埋める事。

雇い入れた牢人の半分を解放する事。

講和が成立すると、家康はすぐに数万の人数に下知し、先ず外濠を埋め立て、続いて内堀もどんどん埋め立て、二の丸、三の丸の櫓も打ち壊してしまった。驚いた大坂方は使者を出して猛烈に抗議したが、のらりくらりとかわして使者を翻弄、その間に大坂城の全ての堀壕を埋めてしまったのである。

家康の狡猾な作戦勝ちであった。

大坂冬の陣が東西和睦になった頃、千四郎のもとに使いの者が手紙を届けて来た。受け取って見ると、高台院の付き人、孝蔵主から

であった。

内容は、近頃高台院様は大坂と関東の争いですっかり気落ちして
いるとの事であった。太閤殿下の築かれし大坂城も、外濠内堀も埋
め立てられ、本丸だけとなってしまうた。いずれ大御所はまた時を
計り大坂城を攻めるに違いない。高台院様を訪ねて来る方々は、口々
に大坂がどうなるとか、江戸方の仲裁は、などと全てが戦ごとの話
ばかり、戦ごとを離れたお方とお話がしたいと申されております。
是非、高台院様のお話相手に、京、高台寺に参られますように。と
いう文面が綴られていた。

千四郎は身支度をし、京に向かった。

京都東山、高台寺は平穩無事のようにであった。

高台院と孝藏主は千四郎を暖かく迎え、茶を点ててもてなし、労
をねぎらった。

「先日、寺普請の堀直政殿が見舞いに訪れました。千四郎たち穴太
衆の働きが良かったと褒めておりました。お陰で良き寺ができまし
た」

高台院が嬉しそうに言った。

「堀直政様の御配下として、恙なく造営されましたこと祝着に存じ

ます」

「そなたを見ていると尾張の頃を思い出します。あの頃は皆、そなたのように日焼けした姿で働いておりました」

「太閤殿下もまだお若い頃でございますね」

「そう、あのお人はちつともじつとしておられず、それは忙しい人でした。身の動きが素早くて、信長様が渾名を付ける前から猿と呼ばれていましたよ」

高台院は楽しそうに笑い出した。

この高台院という人は、いつでもこのように屈託無く、明るい人であった。女性にょしやうとして従一位という高位の貴婦人であるのに、まったく飾らず、驕らず、気さくな人柄ゆえ、高台院を知るあらゆる人たちは敬慕の念を持って接していた。

やがて次第に大坂城の話に移っていった。

豊太閤が天下を治めたのも、大坂城を築いたのも、全てこの正妻高台院の内助の功があればこそ、間違いなくこの夫婦の血涙の結晶であった。

「今となつては秀頼殿の行く末、案じられますが、淀殿が全て決められた事、私にはもう手の届かぬことです。大坂城とて消滅しても

私にはどうする事も叶わず、ただ見守るだけです。秀頼殿が豊臣家を継いだ以上、あの城も、太閤の遺品も、残されしもの全て秀頼殿が受け継いだのです」

「何か心残りのものがござりますか」

千四郎が尋ねた。

「黄金の甲冑、金瓢箪馬印、金糸の陣羽織、金銀飾りの大小太刀、これら武辺の具は当主秀頼殿が受け継ぐもの。私には何の未練もありません」

この後、高台院はじつと目を閉じ何かを考えているようであった。

「只一点、あれだけは私の手に残しておきたいという品があります」

「只一点。それを私がお伺いしては無礼でしょうか」

「いいえ、お話ししましょう」

高台院は意を決して静かに語り始めた。

「あのお人が関白に就任した時、禁中茶会が内裏で催されました。

その折、時の帝、正親町天皇から御下賜された玉杯があります。それはそれは美しい紫に輝く玉杯でした。あの人は大感激し、嬉し涙で声も出ませんでした。太閤という人は、朝廷をこの上無く尊敬していたのです。あの人はこれまで受けた数ある名誉の品でも、これ

だけは一番の宝であると言い、生涯大切にしていました」

高台院の目が潤んで見えた。

「自分が死した場合、北政所、この私が受け継いで後生大事に守ってくれと、常々言っておりました。太閤が没した時、私は落飾して大坂城を出る事になりました。しかし秀頼殿が豊家を継いだ以上、太閤の宝は預かれなかったのです。淀殿が強く反対され、ごく僅かの遺品を頂いて城を去りました」

ここまで話して高台院は、そっと目頭を押さえた。沈黙の後、また静かに語り続けた。

「大坂城の宝物殿に保管されている太閤の宝の遺品、紫煌の玉杯だけは、太閤の為にこの私がお守りしたいと願っております。大御所は大坂城の秀頼殿、淀殿をこのままにはすまい、いずれまた攻め上ることでしょう。大坂城は今度は持ちません。あの天子様御賜の紫煌の玉杯、あの一品だけは気懸かりでなりません」

「どのような玉杯なのでしょう」

「紫色に光り輝く、唐代王侯秘蔵の玉石で作られし皇杯です」

「玉石ですか」

石と聞いて千四郎の目が光った。

穴太衆の宗家として、代々石に縁する家系に生まれた千四郎だけに、石に対する特殊な反応があった。

「その玉石で作られし皇杯、私も一度目にしようございました」と千四郎は素直に答えた。

「おう、そうでした。千四郎は石を縁とする一族、石切家でありましたな」

高台院はまた屈託の無い笑顔に戻り、この話を打ち切った。

高台寺の帰途、千四郎は先程の玉杯の事だけがいつまでも耳に残った。

天子様御賜の玉杯、紫に煌く皇杯。どれほどに美しいものか、一度見たい。なんとか高台院様のお手元に残したい。そんな思いが千四郎の頭の中を駆け巡った。

元号が変り元和元年、大御所家康は大坂方に、大坂城にいる牢人たちに全て追放せよと命じた。当然大坂方はこれを拒んだ。

「よし、これが最後の決戦である」

再び大坂城攻めを六十余州の諸侯に号令し、東軍は大坂城の周りに参集した。

淀殿、大野治長は自分たちの失敗に気付いたがすでに遅かった。

二人は大御所が高齢なので、何とか凌いでおれば機が訪れるという甘い考えだったのである。

今度の大坂攻め、東軍総勢十五万に対し、大坂西軍は五万に半減していた。本丸だけ残す大坂城に、再応募する牢人たちが半数ほど見限ったのである。

ここに大坂夏の陣が開始された。

本丸だけでは籠城作戦は取れず、西軍は城を出て、大和路、河内路の二手で野戦を仕掛けた。西軍の将、塙直之が戦死、翌日には後藤基次、薄田兼相、木村重成が次々に戦場に散っていった。残る西軍の軍師真田幸村は、大御所の本陣、茶臼山に攻撃をかけた。雷神の如き凄まじい戦いぶりに、真田幸村は古今の名将なりとその名を後世に残した。今一步のところまで大御所を追い詰めたが、力尽きて討ち死にした。家康もこのときばかりは一瞬死を覚悟したほどであった。

真田幸村、毛利勝永らが戦死してもう西軍は本丸、天守閣にいる秀頼ら側近と城兵だけであった。

淀殿は秀頼の正妻で將軍秀忠の娘、千姫を差し出し、秀頼の助命

を願ったが大御所は許さなかった。

その頃、大坂城を離れた小高い丘の荒れた古刹の中に、千四郎とその子、小四郎がひっそりと立っていた。

「小四郎、わしは行く」

「父御、石工は戦場に出てはならぬ掟ですぞ」

「わしはすでに石工ではない。頭領の座はお前に譲った」

「それは理屈になりませぬ。石工は武人に非ず、戦場に出てはならぬとは父御の常の言葉」

「ふ、一人前になったの、小四郎」

千四郎の目は笑っていた。

「わしは戦場に出て戦うのではない。ある物を探し出して高台院様に届けるだけだ」

「それは聞きました。しかし保管されているかも疑わしい状況で、しかも蟻の這い出る隙の無い陣中抜けて、どうやって城内に潜入するのですか」

「小四郎、わしは前石工頭だぞ、大坂城普請は我らの手で成った。本丸に続く抜け道、わしが知らぬと思うか。紫煌の玉杯の置かれし

場所、すでに探りは終えている」

「万一の事あれば、母御になんと申しまするか」

「その時はお前が静に話すのだ。これは男の仕事である」と

「もう一度聞きます。本当に自信がおりですか」

「ある、わしは石切千四郎だぞ」

千四郎は大坂城へ抜ける間道を知り尽くしている、と小四郎に言った。

「小四郎、わしの申した場所に潜み、わしの戻るのを待て」

そして最後に、

「わしは死ぬ為に行くのではない、生きる証の為に行くのだ」

と言い残し、小四郎が見つめる中、振り向きもせず遠くに走り去った。

朝日が昇る頃、東軍は大坂城本丸めがけて総攻撃を掛けた。この夏の陣、東軍の中で際立った働きを見せてきた越前福井松平忠直隊が、先陣を切って突き進む。寄せ手がどんどん天守閣目指して押し寄せる。本丸に火の手が上がり、勢いよく燃え上がって、東軍兵士は一瞬怯んで退いた。その時、黒い影が天守閣の中に飛び込んでい

った。

「あれを見たか」

「見た。どこの手の者か」

兵士たちは口々に問い糾した。

石切千四郎だった。

抜け道を辿り、城内に潜入し、東軍の兵士に混じり、落城直前に火の手が上がる天守閣に飛び込んだのだ。

紅蓮の炎の中、三階宝物殿を目指した。目指す物が見付かれれば奇跡、駄目ならそれも運命、この日の千四郎に迷いは無かった。

燃え盛る火の海の中、千四郎は神に奇跡を祈った。そして己の直感を信じた。

耳を劈く轟音、凄まじい音を立てて崩れ落ちる火柱が千四郎の全身を襲った、火炎の衝撃が身体を走った。

——わしは石工の掟を破った。石工頭だった男には万死に値する罪だ。

そんな思いが頭を掠めた。

——弾正様も信長様もこのようであったか。

炎の中、千四郎は自分の死を意識していた。

大坂城本丸が焼け落ち、秀頼、淀殿母子は、身を潜めていた山里御殿繻蔵で自刃して果てた。従者の手によって繻蔵は爆破され、大坂城と共に消滅した。

家康は秀頼の遺児国松の隠れ家を片桐且元から聞き出し、見つけ出してこれを斬殺した。

この後、京の阿弥陀峰、豊国大明神の霊廟を全て打ち壊し、形残らず消滅させた。

これを伝え聞いた高台院は、

「これ程までに、太閤を憎んでいたとは」

と嘆いた。

怒りをあらわにする孝蔵主に、

「天下人になると人が変わる。太閤も大御所も同じであった」

と肩を落とした。

ある早朝、薄暗い時分に高台寺に若い男が訪ねて来た。男は応対に出た孝蔵主に、

「石切小四郎と申します」

と名乗った。

対面した高台院は、

「千四郎のお子か、父によく似て逞しいこと」

と笑顔で応対した。

「初めて御意を得ます、石切千四郎の一子小四郎にござります。早朝も省みず御無礼をお詫び致します」

「余程の事とみえる。構いません、私共は年老いて朝早い分は苦になりません」

小四郎は苦渋に満ちた面持ちで前に置かれた布包みを解いた。布地が一部黒茶色に焼け焦げ、中身が覗いていた。小四郎は、漆黒の上に螺鈿の文様と金地の七五太閣桐の紋章が浮かぶ小箱を取り出した。そして、無言で拝礼して、高台院の前方に差し出した。

孝蔵主がこれを受けて確認しようとしたが、

「よい、私が」

と高台院が言っただけで直接手に持って小箱の組紐を解いた。

蓋を開けて中身をじっと見つめる高台院の顔が嬉しさに輝いた。

「これをなぜ、なぜそなたが持参した」

「これを持参した仔細をお話致します」

小四郎は父千四郎の事を語り始めた。

小四郎は長く感じる時を、辛抱強く父を待っていた。

長い抜け穴の出口、蠟燭の火を消して身を潜めて待つ小四郎の前に、ようやく這いずりながら千四郎が姿を現した。小四郎は父を見てぎよつとした。全身に火傷を負い、髪、顔は焼け爛れ、胸や背は血に染まり手足は焦げ臭く爛れていた。激痛も最早感じないのか、息も絶え絶えの中、千四郎は焦げた布袋を小四郎に手渡した。

小四郎が抱き起こそうとすると手で制し、差し出す水をゆっくり飲み、苦しげな声を振り絞り、

「奇跡だ……見たぞ玉杯……」

声と息が、か細くなっていった、千四郎はゆっくり瞼を閉じ、最後に、

「高台院様に……静を……」

静かに石切千四郎は息絶えた。

「父は私の手を握り亡くなりました」

話す小四郎の目に涙が光った。

「過ぐる日、高台院様が父にお話になられた玉杯を、父はなんとかお手元にお渡しする事を考えておりました。父は悔いの無い穏やか

な死に顔でした。宝物殿でこれを探し出し、紫煌の玉杯を見る事ができて満足していたのです」

じつと小四郎の話に耳を傾けていた高台院の目から涙が溢れ、一筋の光となって頬を伝わり落ちた。

「千四郎が、そこまで思ってくれていたとは……」

高台院は袖で目頭を押さえた。

孝蔵主も両袖で顔を覆って忍び泣いた。

「小四郎、私の為に父を亡くし、あなたに掛ける言葉もありません。

この通りです、許して下さい」

深々と小四郎に頭を下げた。

「勿体のうございます。父は高台院様の喜ばれる事を願っていたのです。さぞ満足の事と思います」

高台院は気を取り直し、

「こなたの父千四郎が、命を懸けて持ち帰った玉杯、小四郎にも見せましょう」

小四郎も孝蔵主も居ずまいを正し、高台院が玉杯を取り出すのを待った。

千四郎の魂と引き換えに高台院の手元に戻った、天子様御賜の玉

杯が姿を現した。

差し込む朝日を浴びて、紫色が濃淡の光を放つ、その名の如く紫の煌きらめきき。深い趣のある輝きと形は、この世の造形美を凝縮したかのようなであった。

見つめる三人の瞳、美も醜も、血も涙も、有も無も、戦乱に弄たぶらかばれる運命すら、紫色に煌く一閃の光となって忘却の彼方に飛び散り、三人は時を忘れて紫煌の皇杯に見とれていた。

四百年以上の歳月が流れ、石切千四郎が造りし大坂城の石垣は、長い歴史を刻み現代にその姿を残している。

千四郎が工夫した鉛と鉄でつなぐ“鉛ちぎり”の大石垣は、伝説となって今に語り継がれている。

千四郎の後を継いだ一子小四郎は、江戸城大改築で穴太衆の盛名を六十余州に広め、その江戸城は千代田城と名を変え、古今の名城として後世に残ったのであった。